

天保九年 豊前・豊後の幕府巡見使記録

―『江戸ヨリ大坂迄巡行記』

豊後巡行記并ニ大坂ヨリ海上豊前迄巡行記』一・二・三卷―

森 弘 子
宮 崎 克 則

【解題】

天保九（一八三八）年、九州へ派遣された幕府巡見使の記録を紹介してきた。

「九州へ来た『諸国巡見使』―天保九年巡見使の記録と解説―」（『西南学院大学博物館紀要』四号、二〇一六年）

「天保九年 幕府巡見使の従者日記（二）―立野良道『西海道日記』一・二・三・四卷―」（『西南学院大学博物館紀要』五号、二〇一七年）

紀要』五号、二〇一七年）

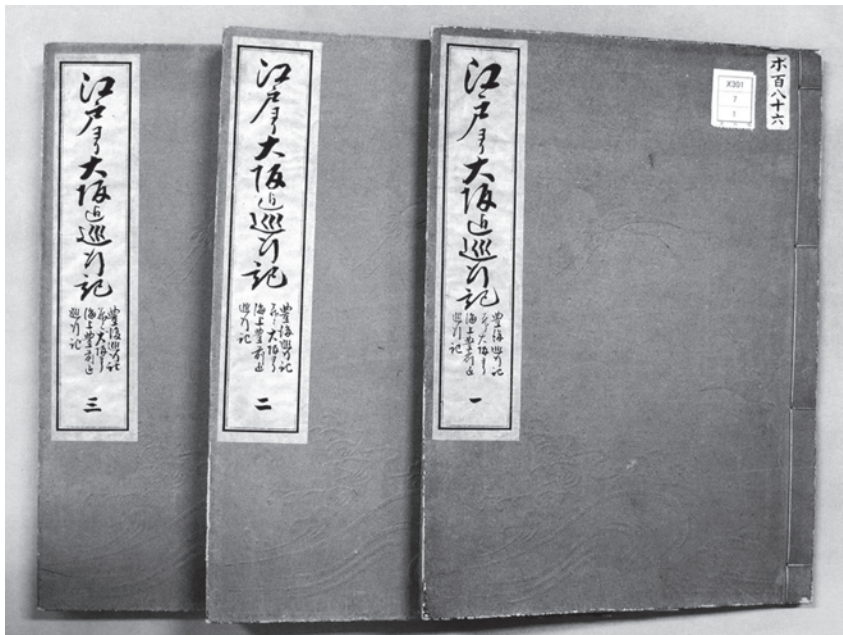
「天保九年 幕府巡見使の従者日記（二）―立野良道『西海道日記』五・六・七卷―」（『西南学院大学国際文化論集』三二―一七号、二〇一七年）

これらは、巡見使として派遣された三人の旗本(曾我又左衛門・大久保勘三郎・近藤勘七郎)のうち、大久保とその従者である立野良道が記したものである。

彼らのルートは、筑前国の若松に上陸した後、陸路を筑前↓肥前唐津へ、玄界灘の老岐・対馬↓五島を経て平戸・長崎、そして佐賀・熊本・鹿児島・日向を廻っている。豊前国と豊後国は通っていない。

その理由は、豊前・豊後は四国とともに別の巡見使の担当だったからである。概ね將軍の代替わりごとに派遣される巡見使は、天和元(一六八二)年から全国を八ブロックに分けて派遣され、豊前・豊後は四国と組み合わされていた。

豊前小倉藩の城下町に近い企救郡小森手永の大庄屋中村平左衛門の日記によると、江戸留守居役の土居半之丞は、天保八年十二月二十三日、江戸で巡見使の屋敷に呼び出され、今回の巡見に関する「心得方」の書付が渡された。その書付は江戸から小倉に



送られ、二月五日には藩内の庄屋たちに通達されて準備が進められる。巡見使の一行は、三月下旬に江戸を発し、四月五日に大坂着、そして海路西下して四月十九に小倉湊口から上陸して宿泊した。小倉藩内は一〇日ほどの滞在、その後に豊後の諸藩領を巡って四国へ船で渡る。

本史料は、副題にあるように、江戸から大坂までの陸路、瀬戸内の航路、豊前・豊後の巡見記録であり、四国の記事は含まない。巡見使一行の構成を、小倉藩田川郡の大庄屋記録にみると、

御上使御三方様御同勢

一番 平岩七之介様

御用人 黒瀬源之進様 高橋東五郎様

給人 布田庄司

給人目付役 足立友右衛門

給人席祐筆 村上作兵衛

近習 関戸民五郎 小林渡吉

中小姓 近藤嘉十郎 平岡嘉三治 斉藤嘉太郎

徒目付 林田伝八

徒 白石保次郎 渡辺由蔵 戸野岡兵次

二番 片桐鞞負様

御用人 服部莊助様 小松原尉之進様

近習格祐筆 友野伝右衛門

中小姓 佐藤三平 小林勇八 山菅秀藏 塩沢勝藏

近習 渡辺栄造

給人目付役 宇佐神東馬

徒目付 浅井源次郎

徒 中田正藏 篠崎怡藏 菅原肇

三番 三枝平左衛門様

御用人 土屋幸次兵衛様 橘郡司様

給人目付兼 藤江市左衛門

納戸方 伊藤巨

書方兼 鈴木孝藏

近習 立花嘉右衛門 立科吉十郎 建井嵩右衛門 大隅政右衛門 遠山安五郎

徒目付 寺田宅藏

徒 里見国之助 河野亀吉 寺田豊次郎

計四人であった。これに荷物持ちや駕籠を担ぐ足、案内の庄屋たちが加わるので、総勢は一〇〇人を越える。三人の旗本のうち、一番は平岩七之助（使番、一三〇〇石）、二番は片桐鞞負（内小普請上野惣七郎同居差置、一〇〇〇石）、次いで三枝平左衛門（西丸書院番、五〇〇石）であり、本史料を書いたのは、三月二十一日の記事に「品川釜屋にて昼の餉す、平岩七之助・三枝平左衛門に逢て…」とあるから、必然的に片桐ということになる。

片桐がどのような人物であったか不明であるが、絵が得意であったらしく多くの挿絵があり、自らの行列図も載せている。また女性の髪型や化粧に着目したり、所々で和歌も詠む風流人である。そのことは、巡見の旅日記としてまとめられた本史料を読めば明らかとなる。本史料は、国文学研究資料館に「三井文庫旧蔵資料」(MS301) 縦二六・五×横一九センチ)として所蔵されている。どのような経緯で、三井家の事業史編纂のため大正七年に設けられた「三井文庫」に収まったのか不明である。本史料に基づき順路を示す。

〔注〕

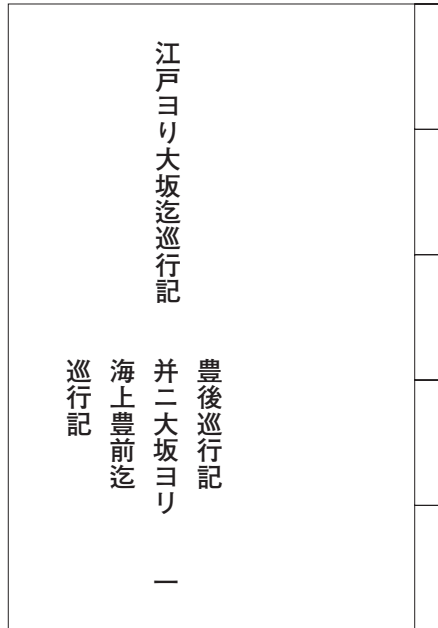
- (1) 北九州市立歴史博物館編『中村平左衛門日記』六卷（一九八八年）。
- (2) 天保九年『巡見御上使様御通駕紀事』（六角文書）八一八、九州大学記録資料館九州文化史資料部門蔵）。
- (3) 小川恭一編『寛政以降 旗本家百科事典』（東洋書林、一九九七年）、熊井保編『改訂新版 江戸幕臣人名事典』（新人物往来社、一九九七年）。

【凡例】

- 解読にあたり、用字は原史料のとおりとするが、常用漢字のあるものはこれを用いた。
- 挿絵については画像を掲載した。なお、見開きの挿絵や文中の挿絵があるが、日付ごとにまとめて掲載した。
- 異体字・合わせ字は正字に改めた。
- 変体仮名は、平仮名に改めた。
- 句読点と並列点は解読者による。
- 「夕」は「より」、「ホ」は「等」、「而」は「て」、「江」は「え」とした。
- 破損や虫損等で判読不能の文字は、□とした。
- () は解読者の注である。

なお、本史料の画像は、国文学研究資料館のホームページ「館蔵和古書目録データベース」で、書名を入力すると、すべての画像を見ることができる。

【表紙】



天保八年七月

天保九年三月

おふやけの天か下、御代しろし召すはしめとて、天保ツ八の酉のとし七月中の六日、豊前・豊後・伊予・土佐・阿波・讃岐・淡路浦々島々までも廻るへき命を蒙り、くさくさのたまもの有て、君の御恩ミの有かたさを頭にいた、き、同し九の戌のとしの弥生廿一日に首途しぬか、旅の行程をあらまし書付ぬ、画もつたけれど、見しまゝを書ぬ、人に見すへきにもあらず、只己か心を慰るのミ

三月廿一日

品川釜屋

廿一日 夜明方より雨降ぬ、辰の時はかりに立出、赤羽根瓦屋半右衛門方にて小休、この所より雨はれぬれはうれしく、此家を立出て、品川釜屋にて昼の餉す、平岩七之助・三枝平左衛門に逢て、けふの旅立を互に賀して、平岩は先へ立ぬ、夫よりつゝき此家を立ル、馬の鼻向せし人々に別れをつけて、旅の心に成ぬ、此処より杖扨ひとて、ふたり先へ立て、下にくゝと旅人を制し行けは、有かた涙に袖をぬらしぬ、海晏寺の紅葉も今芽出しにて、見るへきにあらず、鈴か森、大森、六郷川の船渡しを越へ橋樹郡川崎、是迄二里半、鶴見、生麦、式里半行て神奈川、人穴、かたひら橋を渡り壱里九丁にて程ヶ谷、藤屋四郎兵衛方え泊りぬ

三月廿二日

廿二日 晴天、鶏の鳴ければ、眠きまふたをこすりながら駕籠に打乗て出ぬ

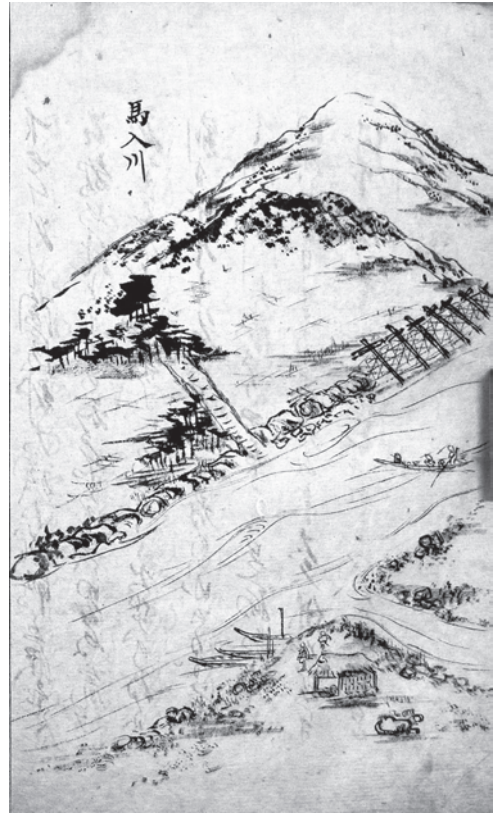
春眠を 駕籠にゆらるゝ 旅路かな

馬入川

武蔵・相模の国界、境木村、やきもち坂、二里九丁行て相州鎌倉郡戸塚、原宿、道坊坂、藤沢寺、二里にて高座郡藤沢、四ツ家、馬入川船渡しを渡り、八幡村三里半過て、大住郡平塚、迎來寺、化粧坂、式十七丁行て陶綾郡大磯、小磯、鴨立沢、色々古歌あれとも人の知る所なれハ略ぬ、虎ヶ石を見んとて、樂しむかひなく、火災の為に割れて今は名ノミなり、春の永き日も暮て酒匂川を渡り、四里にて足柄下郡小田原十一万三千百二十九石余、大久保加賀守城下、庫屋三四郎宅え泊る、江戸より廿里來にけり

小田原

馬入川



三月廿三日

廿三日

晴天、卯の時に出立、山えかゝる湯本、老ヒか平、すくも沢、御関所にて駕籠の戸を

箱根

引けは、関所番頭砂利迄出て、御番所相替儀なきよしを申聞て、打通りぬ、箱根権現え額つきぬ、権現御朱印高式百石、四里八丁行て箱根芦湖、世に管根の湖水といふ、めくり四里三十丁

有といふ、相模・伊豆の国界、伊豆大明神御朱印高五百三十石、三里廿八町にて豆州豆州君沢

郡三島喜瀬川、伊豆・駿河国境、壱里半行て駿州駿東郡沼津、高二万石、水野出羽守城下、本

陣中村九左衛門宅え泊

三月廿四日

駿府町

廿四日 曇、卯の時出立、千本松原観音堂老里半行て原、一本松、四ツ谷、本ト吉原、広沼、右の方富士の裾野に有大沼なり、沼廻り二里二十二丁、此沼、平家水鳥の羽音におとろき返登りし所、富士山、愛宕山三里式十七丁行て、富士郡吉原、富士川船渡しをわたり、岩瀬二里三十丁にて庵原郡蒲原、中村、由比川、老里行て庵原郡由比、薩埵峠、興津川、歩行渡り二里十三丁行て興津清見寺、清見カ関の跡、庵原村一里二丁ゆきて江尻、駿府町奉行支配、本陣羽根半左衛門宅え止宿



富士川



文庫山



双子山

三月廿五日

今川家

十団粉

藤枝

大井川

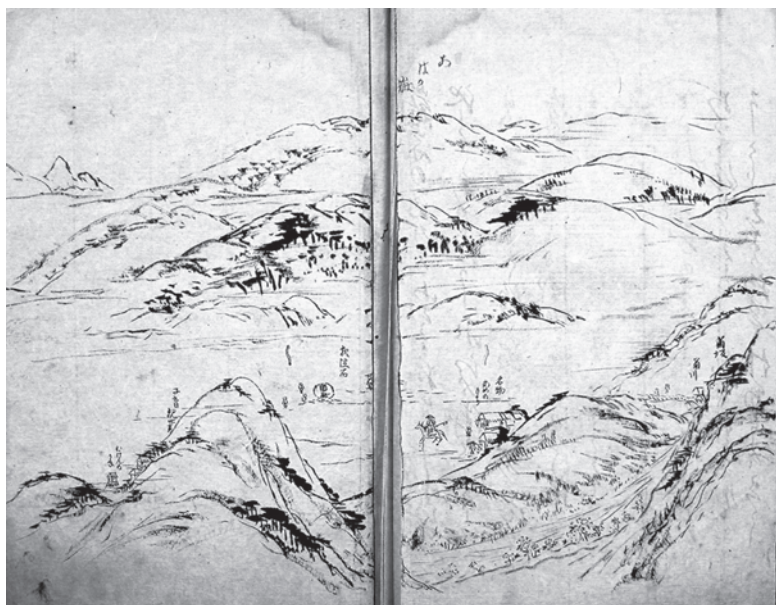
廿五日 天気よし、またくらきに立出、小吉田、富士、浅間の宮二千六百石、忒里廿五丁行て、阿部郡府中、阿部川歩行渡、臨濟寺とて今川家の菩提所有、寺領百石、サハタリ、一里十六丁行て、有渡郡鞠子、業平朝臣修行者にあひ、夢にも人にあいぬと詠し、鳶の細道は山間なり、宇津谷峠名物十団粉、此団粉売る訳を土人に問しに、むかしこの峠古猫出て旅人を取喰ふ、夫を地藏尊あはれみ給ひて、かの古猫にのたまハ、汝色々に化して、往來の旅人に怪をなすよし、左あらハ我前にて小さき団粉に化し見せよと有しに、忽団粉に化したり、其時地藏尊其団粉を一呑にし給ひ、それより後猫出る出る事なくして、人々よろこび、猫のほたい(菩提)の為とて、今にちいさき団粉を売るよし、こハ信しかたき咄しなり、二里九丁行て志太郡岡部、瀬戸野、染飯、水守え忒里廿六丁、藤枝本多豊前守領分、藤枝の西の方小忒里程先に水江の池とてあり、むかし水江の浦島か子といふもの、此あたりて釣を垂しに、大なる亀出て背を向けしゆえ、浦島か子打乗て海上にかみツ、終に竜宮界へ渡りしとそ、又丹後の与吾の湖にて、浦島か子釣をたれしに、前の事によく似よりたる説あり、何れかしかたし、信州寢覚の臨家寺に、うらしまか釣竿什物として有之、田中の城、大手町中左りに有、此城は、甲陽の馬場美濃守信房か繩張なり、右の方十四五丁山上に多ほし岩とて面白き大岩あり、瀬戸川、かち渉、二里八丁ゆきて島田、大井川、駿河・遠江の国界、大井川この節水増して、渡し錢九十三文に成り、川もとましなんとせしに、夕暮に輿台にて越しぬ、忒里ゆきて遠州榛原郡金谷、本陣川村八郎右衛門宅え泊

駿州あたご山

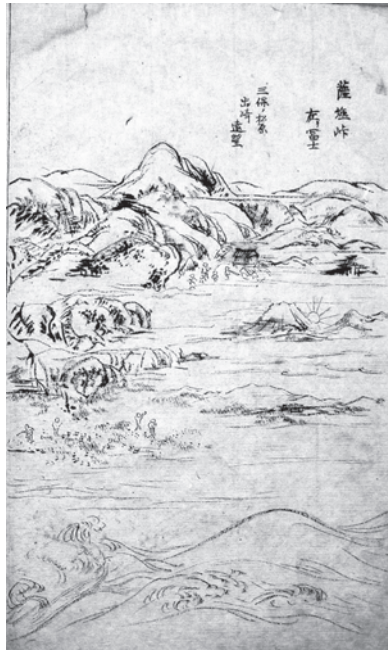


足高山

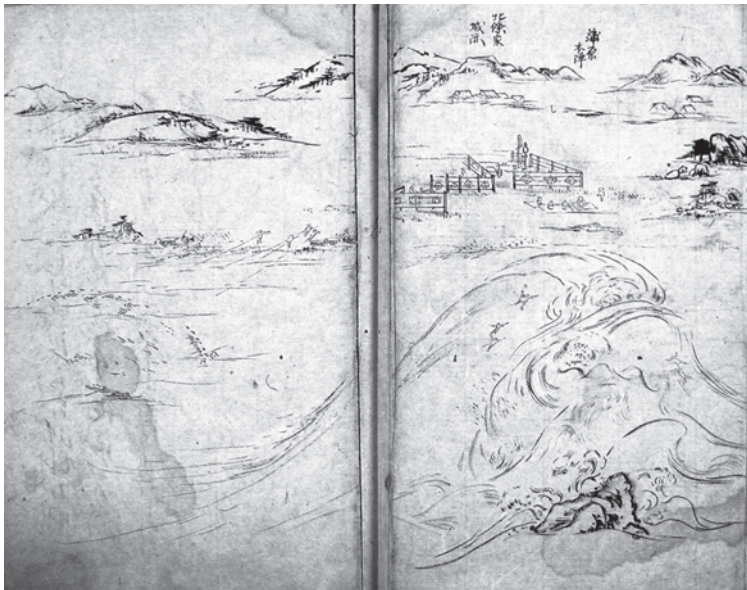




三保ノ松原



蒲原本陣
北條家城跡



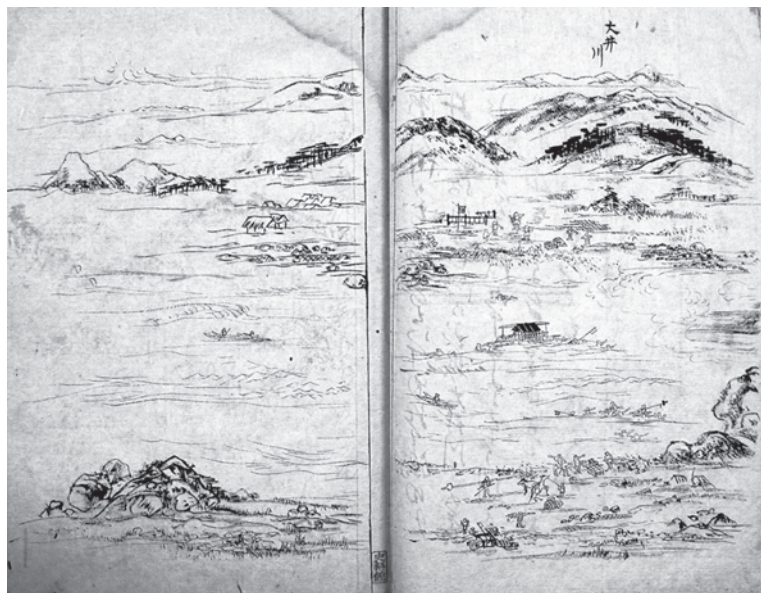
三月廿六日

掛川

天龍川

廿六日 曇、卯の時に立、布引ヶ原古

戦場、佐夜中山、夜泣石、壱里式十四丁行
 て佐野郡日坂、蕨もち、よめか田、しう
 とか田、掛川、太田備後守城下、江戸よ
 り五十五里余、高五万三千七石余、此処
 の町に下坂といふ鍛冶あり、小笠原山と
 云あり、小笠原与八郎よく城を守りしか
 は、此名あり、この所小女家々に花蘆を
 織、其見事さ手際感るはかりなり、原川
 二里十六町行て山名郡袋井、熊野権現社
 有、七拾五石、岩井といふ所有、海辺よ
 り十町計り右に、源二位頼朝卿鶴に黄金
 の小札を付て放ちたる所、此日昼後より
 雨降出し、壱里半ゆきて繁田郡見附八幡
 社三百石、大乘院坂、大森、天龍川船わ
 たし、四里八丁行て敷智郡浜松、江戸よ
 り六十五里、水野越前守領分、高六万石、
 佐藤与左衛門宅え泊

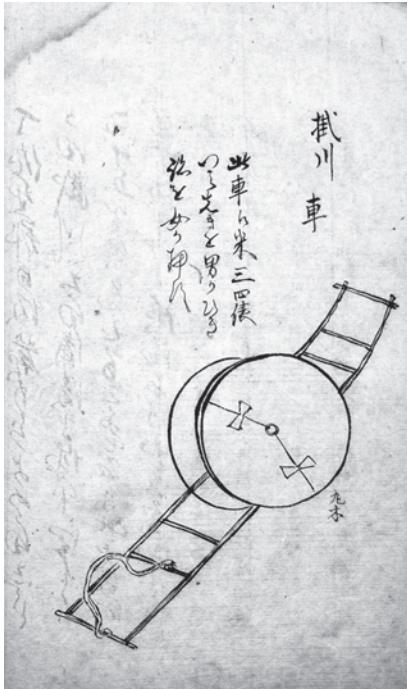


阿部川



掛川車

此車え米三四俵
つミ、先きを男が
ひき、跡を女が押す



(半丁余欠損、廿七日の日付も欠損)

三月廿七日

(廿七日) …湯谷の石塔脇に桜樹あり、湯谷か法名、珠月院貞玉法女、建久九年五月三日と有、老母か法名、善生院池栄比丘尼、建久元年四月三日とあり、今切入江、今切往古湖水なりし所、宝永年中津波にて海と一ツになる、是を新居の渡しといふ、松平伊豆守より馳走船出る

春風や 波も荒井の 渡し船

新居

新居、松原伊豆守領分、御関所、浜名の橋けハ無之、塩見坂、一里廿四丁、浜名郡白須賀御料、

遠州・^(つ)参州国界、猿か番場の柏

餅、一里十七丁行て三州渥美郡

二川、松明峠、この山躰^(つ)躰多し、

吉田、江戸より七十二里、高七

万石、松平伊豆守城下、吉田の

橋長さ百二十間有、宝飯郡御油、

木下茶屋、十六丁行て赤城、宝

蔵寺、神君御宝物多し、夜に入

平松弥一左衛門宅え泊、けふは

昼後大雨にて難儀す

荒井御関所
御油

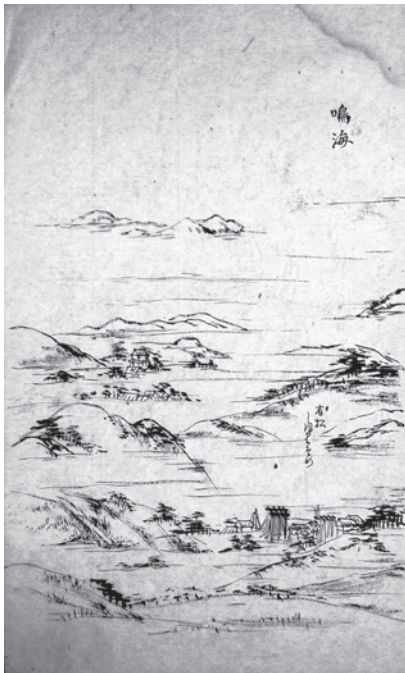


三月廿八日

矢矧橋

尾張殿
御朱印

廿八日 曇、卯の時過に出立、二里九丁行て額田郡藤川、小豆坂、壱里廿五丁行て岡崎、江戸より七十五里、五万石、本多中務太輔城下、矢矧橋長さ百六十間、中田村、三里二十九丁廿式間ゆきて碧海郡池鯉鮒、土井淡路守領分、参河・尾張国界、桶狭間、今川上総介義元戦死の跡、屋形狭間ともいふ、古松の下に標石あり、是は明和八年十二月、千代倉氏の建るといふ、此辺六月朔日に新米を取る、式里三十町、尾州愛智郡鳴海、尾張殿領分、笠寺、壱里廿四丁、熱田宿、本陣南部新五左衛門宅え泊、此宿は入るころは夜に入り、町家九軒にて馳走の簞を焚ありさま、古雅にて面白し、^(宿カ)旅へつくや否、尾張殿より御朱印改として江崎清左衛門来る、御朱印改の訳を尋しに、昔は偽りの御朱印持参して道中せしもの多くありしにより、改の事、常憲院様より尾州殿え命せられ、其ころ江崎清左衛門、古筆見分いたすにより、役となりて、今に血筋連綿として其役儀をつとめしといふ



今川義元
の古墳

宮



義元鎧掛松

三月廿九日

廿九日 晴、辰の時比、船の支度よきよし案内有て、船に乗る、三百石つみ吉ノ丸、上の間式疊敷、張付さくらに滝の模様、次の間三疊敷、紅葉に芙蓉のはり付、入側付なり、四里ほど出風となり、船はしりかね、沖瀬取船より乗かへ桑名城下に行ぬ

朝こちの 風はいつしか 吹たえて

のどかに霞む 春のうなはら

桑名

七里の渡海を無難にて勢州桑名郡桑名え着、江都より九十四里



伊勢参道

余、松平越中守領分、高十壱万石、此辺の女、島田にて鉄漿(はくろ)を付、髪（髪）の風俗は、此処、牛ちい
さく角を紅絹のきれにて根もとを巻き、荷鞍を置いて遣ふ、牝牛多し、あさけ川、町屋川を渡り、
三重郡四日市、伊勢参詣道の追分あり、本陣黒川彦兵衛宅え泊

四月朔日

四月朔日 夜明出立、杖つき川をわたり、弐里二十七丁行て鈴鹿郡石薬師、この節京都本願寺
え参詣の女夥しく行逢しか、其さまいとおかし

浴衣着て 煤掃さまや 旅女

関川をわたり二十五丁ゆきて庄野、この辺火繩のたはこの看板、泉川を渡り小田村、二里行て
亀山、江戸より百三里半、六万石石川主殿頭分、関川壱里半鈴鹿郡関、一ノ瀬川、朝日弁財天、
筆捨山、けふは四月朔日衣更なれば

花の香を 日ことにとめし 袖なれば

夏のころもに 今朝そかへぬる

衣かふる 隙さえもなき 旅路哉

鈴鹿峠

壱里二十四丁行て坂の下、鈴鹿峠、伊勢・近江国界、この峠一トか、え程の松有、地より五間
程上に控あり、桜のやとり樹生したる有、太さ弐尺廻りもあり、この日桜さかりにて

拾着て 桜見て居る 山路哉

夏の来て 深谷に咲る おそさくら

船の水車

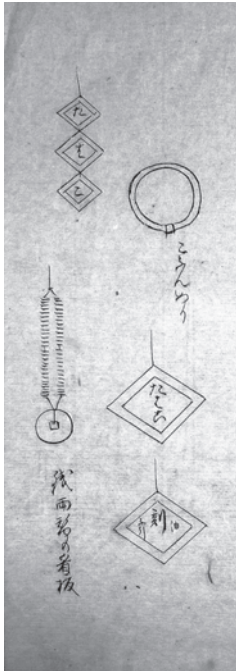
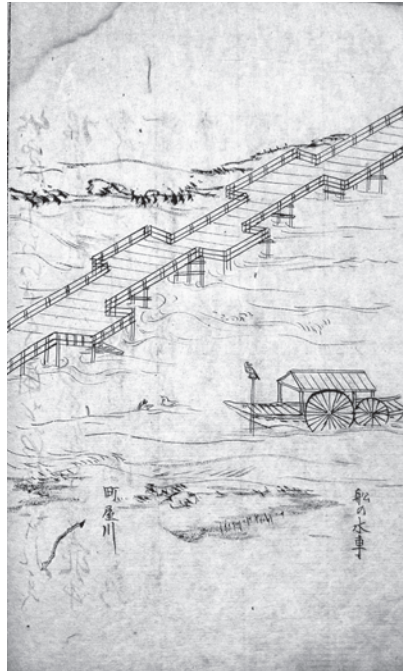
町屋川

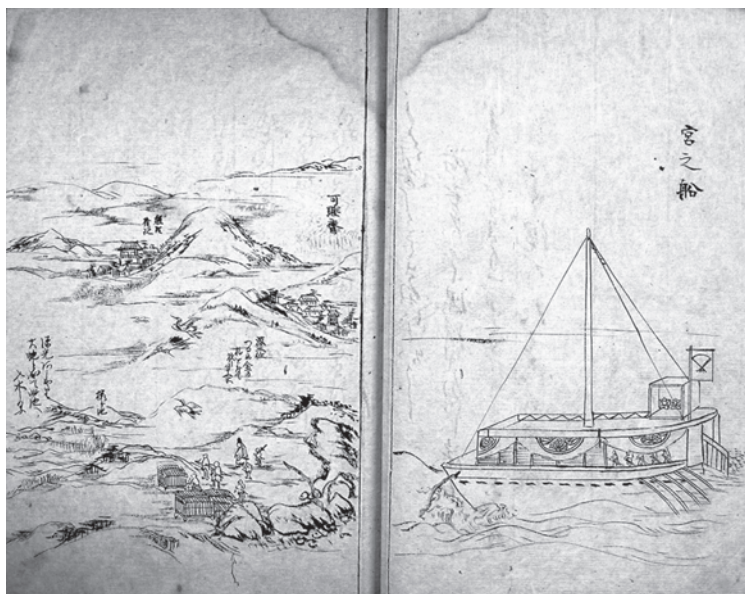
こふんぬり

銭両替の看板

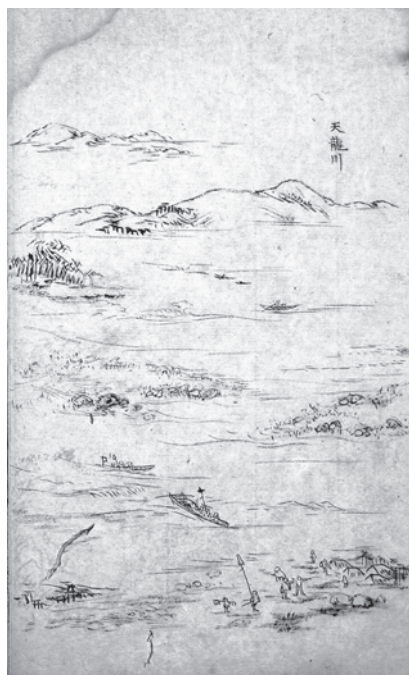
はつ花よりも めつらしくみる

二里半行で、江州甲賀郡土山、松の尾川、松の尾社、本陣土山平十郎宅へ泊





熊野権現

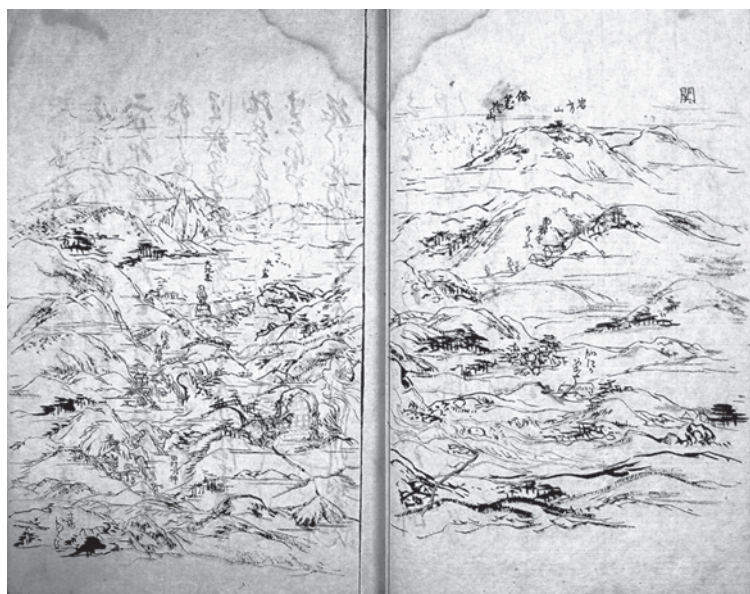


天龍川

金毘羅大権現



関



四月二日

鯨の名物

横田川
舟ヲたし

二日 卯の時出立、大野橋川、此水景清平景清か手洗水と云、二里廿五丁行て水口、江戸より百九里、式万五千石加藤能登守城下、鎮守大宮社祭にて鉾十三本出来て賑ハし、横田川をわたり三雲村、田川村、夏見といふ所あり、茶屋ことに山水を覧え取り、小さき水車を仕かけ人形を廻し、心太を売る、此辺の川は常は水なし、川の堤家の屋根よりも高し、石部石部部宿三久本小右衛門宅え泊、此処ハ鯨の名物のよしゆへ、蒲焼を取よせ見るに、尺五寸程の鯨を背ひらきにし、骨もとらず丸焼にして醤油をかけしゆへ、一口も喰へず



四月三日

琵琶湖

三日 晴、卯の時出立、二里三十五丁行て栗田郡草津、本多下総守領分、野路、玉川、月の輪、秀郷の社、粟津か原、瀬田のはし、琵琶湖廻り七十三里三千壹町、日本湖水の第一なり、近江八景、膳所の城、六万石、本多下総守城下町、立木明神社、例年四月三日祭、けふなん祭りの日なれば家毎に暖簾新にし、青すだれをかけ、挑灯をさけ、殊に奇麗なり



櫛へは五色の短冊をさけ、発句歌を氏子より書て短冊を納める、夫を数多さけてうつくしく、義仲寺、三里六丁行て大津、石原清左衛門支配所、此处文殊四郎包家の宅あり、逢坂山、関の清水、蟬丸明神の祠、名のミ計りてあハれなり、此辺の牛余程大きく、角を二三寸切て有り、往來の片頬牛道とて牛車の通る道あり、敷石へ車の輪の跡自然と凹ミてあり、昼前は下り牛ばかり、昼後は登り牛ばかり、道せはきゆへ行合ぬ為と見えたり、此辺の酒屋の看板



伏見

淀城

淀川

追分、京え三里、伏見街道式里、勸修寺、

城州紀伊郡伏見町、よろしく団扇うる店

多し、未の時過、本陣和田三左衛門宅え

泊、酉の時ころ船の仕度よろしきよしつ

け有て、船に乗る、淀川とふりを行くに、

闇夜の事にてかの水車も見えず、淀城は

江戸より百廿五里半、十万二千石稲葉

丹後守領、此夜大風にて物凄し、船は会

所船にて上の間三疊敷、次の間三疊敷な

り、此処の船頭、取楫をひかへると言ひ、

をもちちをおさえろといふ、船行程にく

らはんか船も宵のほとは出たれと、夜ハ

更、風次第に強くなりければ

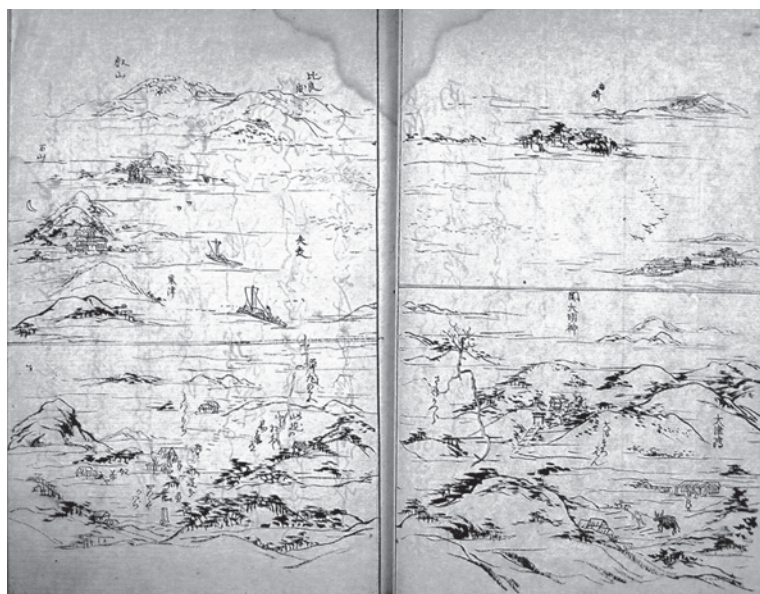
淀川の 水に流れて 行く船の

更て淋しく 鷺の鳴たつ

猶々風はけしくなり、此処に船つなく

やみの夜の ふけゆく淀の 川水に

蛩なかれて 光りこそませ



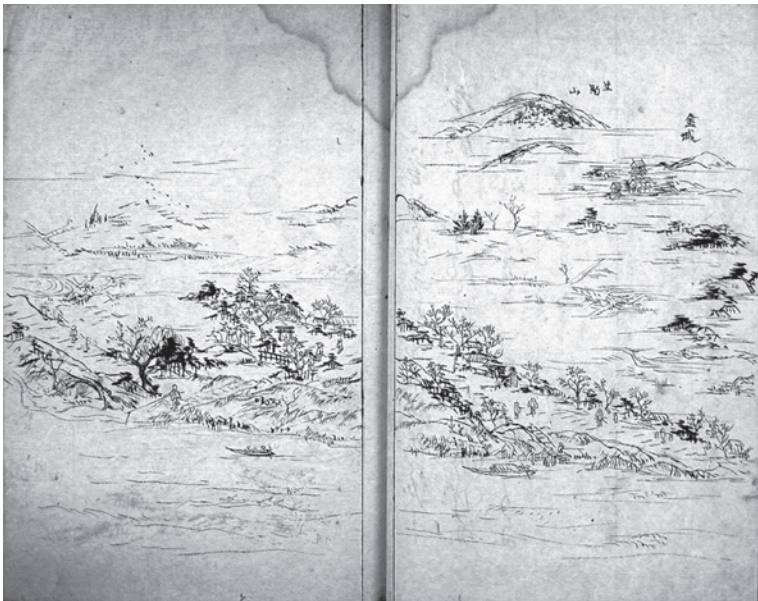
四月四日

大坂御城

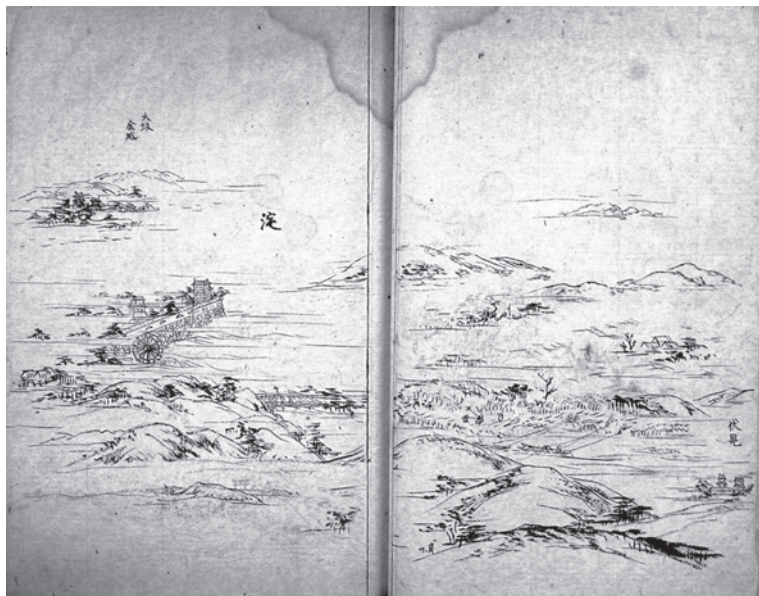
夜明方より風風て船を流し行に、絶景いはん方なし、辰の時はかりに八軒屋え船着ぬれは、あかりぬ

四日 晴、大坂淀屋橋西浜より駕籠に乗り、呉服町会所え着す、午の時より出、御城代中屋敷、両町奉行え参り、夫より大坂御城外回り、其の外所々見物、夕ツ方会所え帰る、江戸より大坂迄馬次五十六ヶ宿、道法百三十七里四丁

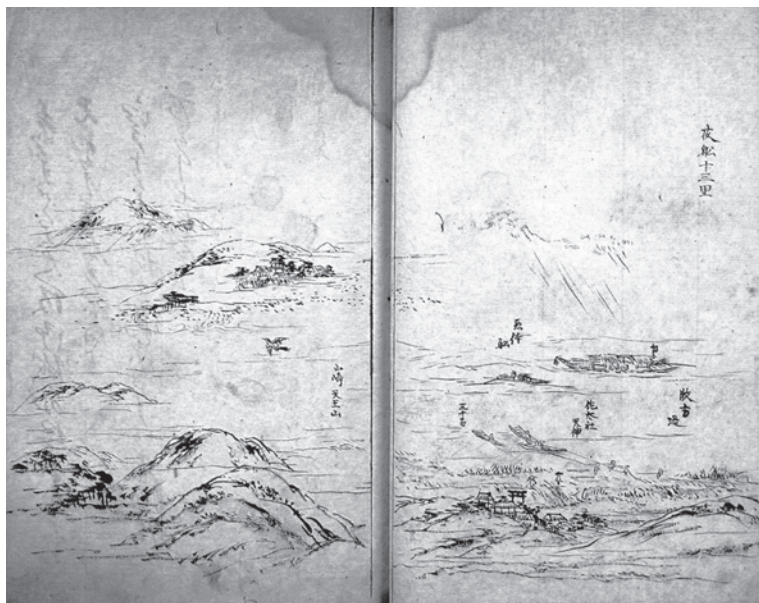
生駒山



淀

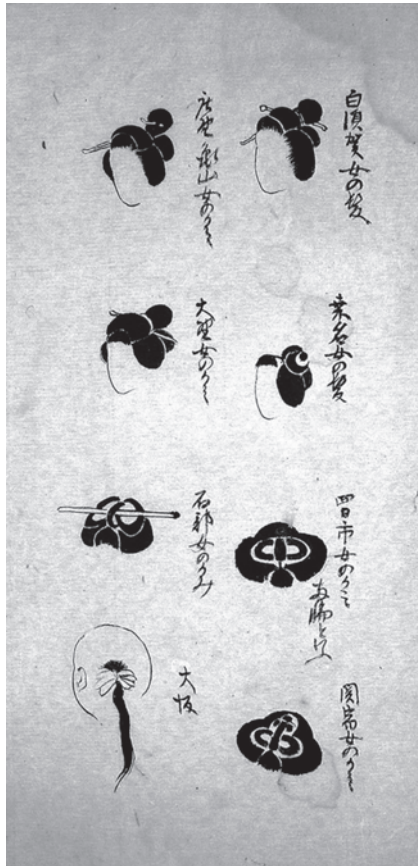


伏見



白須賀女の髪

桑名女の髪



庄野亀山女のかみ

大野女のかみ

【表紙】

江戸ヨリ大坂迄巡行記 豊後巡行記 井二大坂ヨリ 海上豊前迄 巡行記 二				
--	--	--	--	--

四月四日
小笠原大膳太夫

四月四日 夜、小笠原大膳太夫家来より、船の仕度宜き由沙汰有て、五時比、大坂西国河岸より川一丸といふ船に乗、闇の夜を行く

水鶏 鳴く声はかりなり 闇の船

船のうち、上の間は三畳敷、金襴に牡丹に獅子を、春洞斎ト川筆にて画き、床にハ鶴の絵、探幽の掛物、障子は塗骨、幕は紅沙綾に三蓋菱（密）の紋付たるを張たり、船の長さ拾間

船の中にも 牡丹咲し 四月哉

大名の蔵屋敷

此船にて壹里程行に、川の両隣の大名の蔵屋敷にハ、馳走の使者、たれとも闇のことなれば、一向にわからず、只挑灯をふれ共見す、此方の船にても提燈を打振りて挨拶す、夜も九ツ時とおほしきころ、漸にして川口に到り、大船に乗うつる、船は宝寿丸、上の間三畳敷、床、違棚、床の裏に雪隠あり、両頬四畳敷、次の間式畳半、是も両頬三畳鋪、其余は勝手の者居る所なり、八畳敷に広き板の間、二階六畳敷、中段三畳敷、艫五十一挺立、船手の者五十式人、内十三人水主、三十九人浦水子、船大工壹人、船の長さ十三間、幅三間半、八百石積のよしなり、船の先にハ太鼓を釣し、鑓七筋かさり、舟のとも方にハ持鑓二本、幟、吹ぬきを建る、通船鶴仙丸廿六挺立、次船伊篙丸四十式挺たち、駕籠荷物船七反帆五挺立、漕船三反帆五挺立、水取船五反帆五挺立、水夫喰焚船五反帆、惣人数八百人はかり、小笠原家より出す

八百石積

惣人数八百人

四月五日

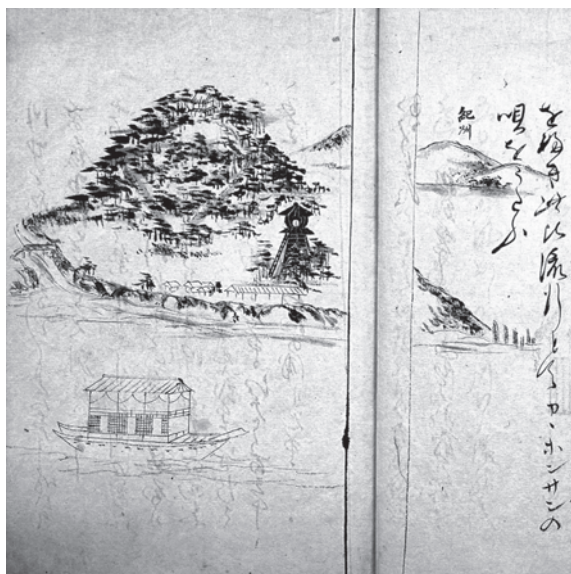
滞船

五日 けふは風あしけれハ、川口に滞船す、此辺の百姓屋敷の如し、川の岸は土を角長にして、干かため組あけて、石垣のかかりとす

組あけし 土を追出す 水鶏かな



四月六日
天保山



六日 けふは、沖荒とて滞船、朝より心よく晴て、天保山え遊ひ出の船多く、やかた船とて二階のある船に幕打、芸子の三味線に客の男の太鼓、唐人笛をふき、此比流行とてカ、ホンサンの唄をうたふ、川中を船にて、はなおくくと大声に呼ひて草履、下駄を売る、見馴ねハおかし

四月七日

尼崎

七日 けふは天気、風もよしとて川口を出船す、きのふ迄、川口船をつなきし退屈に、けふは打ひらきたる沖の気色の面白さに、四方を□□□□^(空白)はや式里こき行て尼崎え来り、城も見ゆる、江戸より百三十五里、この処より大物の浦も見ゆる

きのふまで いつを出船と おもひしか

けふはうれしく 海をみるかな

天保の山を見かへれば、時鳥鳴ければ

天保の 山のあたりや ほととぎす

清盛

風出たりにて、船に帆をあげて三里来り、西の宮、此磯に恵比寿の社有、蛭子流され給ひし時、この浦に上りしゆへ、恵比須の元祖也といふ、式里行て御影に来る、又三里はしりて兵庫、此処は浪花かほしき湊にて繁盛の地なり、築島寺、平相国清盛この島をきつく、^(衆く)松王といふ小姓を人柱に建しに、墓に松一本植てあり、清盛の古墳も有、和田の末崎とて、絶景なる出端あり、式里走りて一の谷、鴨越、鉄拐ヶ峰よりつゝく谷也、義経丹波路よりこの所へ責落す、^(マ)源平の谷とて白赤の砂、川を隔て色とる、この所を壹里半行て鳥崎、須磨寺見ゆる、舞子の浜にそふて舟乗る、この浜白砂にて、曲りたる松の並木絶景

打寄る 波の鼓の 音高く

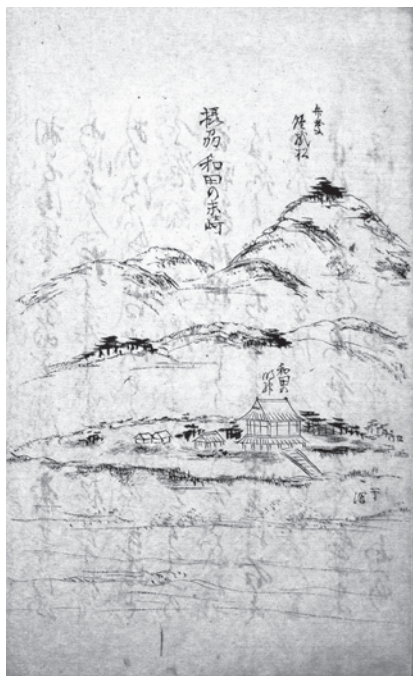
舞子の浜に 浦風そふく

是より播磨灘といふ難所え船乗り掛りしに、風次第に強くなり、大波に乗てはくたり、式里、辛ふして漸く明石の湊に船入りて泊りぬ、風つよきによりて、十五里船ゆきぬ

短夜や 夏も見ぬ間に 出船法螺

播磨灘

摂州和田の末崎



沖より天保山を臨む



四月八日

石の宝殿

八日 夜明比出船、西の方を向て
 五里行て、高砂の浦、この辺の商人、白き木綿のもも引きをはきて
 歩行也、尾上の鐘、高砂の松、石の宝殿、曾根の松、これを播州四ヶ所の名所なりといふ、此日、松原佐兵衛督、酒井雅樂守両家より漕船五艘つゝ、出す、昼後より雨降出し、水主八家々の印の桐油に陣笠を着、掛声高々と船こくさまい

と面白し、四里行きてしかまつといふ処、水よく澄て深さ十尋ほど下に遊ふ魚もよくすぎ、赤海月多く殊外美しく、毒有よし、此辺に遊ふ鳥あり、鴨のやうにて、嘴迄黒く両羽の先白し、見なれぬ鳥ゆえ船長に問へハ、海雀といふ鳥といふ、鳥を見る間に弍里行て、網干といふ所に来る、けふなん仏生日なれ共、海上なれハ卯の花をたに見る事かなハねは、貫之(紀實之)、うみ松(ミル、浦松)をたにひかましものを、といふことを思ひ出しぬる

白浪を 卯の花と見ん 仏の日

二里行て、室といふ湊へ着船す、けふは十三里

とりわきて 今宵は暑く 覚へけり

室の湊に 戸はたてねとも



須磨寺

四月九日

九日 雨つよくふり、出船なりかね、このみなどに泊る、退屈ゆえ釣をはしめしに、鯨はかり釣れければやめぬ

室の西泊り

魚見櫓



四月十日
赤穂

十日 けふハ天気よく、卯の時はかりに船乗出し、三里行て赤穂末崎え来し比、西風強く吹出し、浪立汐合あしく暫く此所に船かゝり、風少ししつまりてまた船を乗出し、式里ゆきて大雨り脱せふ、湊へ着、けふは五里にて泊る、大たふといふは、島にて家数三十軒あり

室の明神

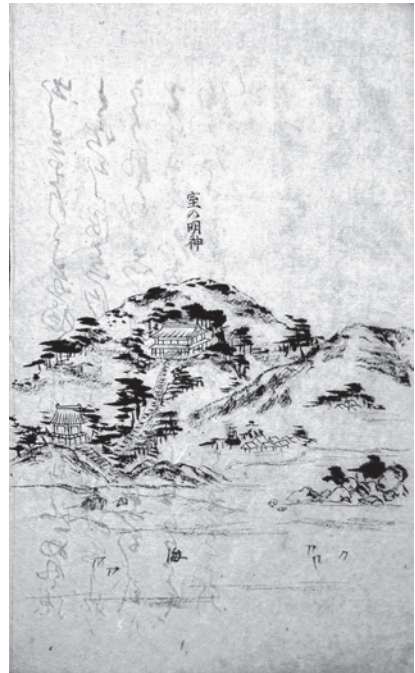
四月十一日
牛窓

十一日 けふは晴、卯の半時はかりに船乗出し、五里行て牛窓といふ処へ暫く船つなき、汐合よくなりて船乗出し、弐里行て犬島、壱里行て京上臈といふ島有、弐里こき行て日比といふ湊へ着、けふは十二里にて泊

四月十二日

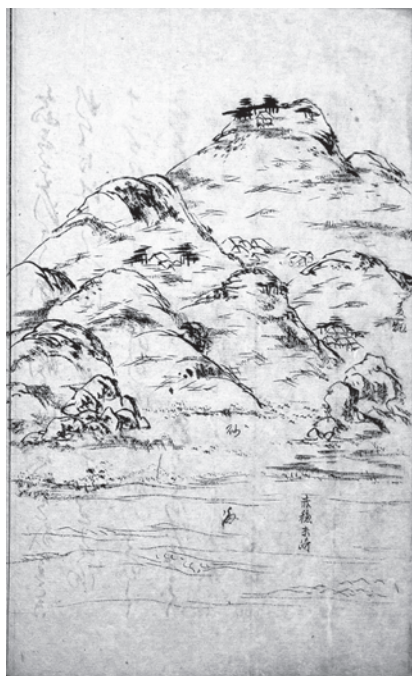
十二日 けふも晴天、卯の時計り船のり出し、三里行て下津井の湊へ船かゝる、汐合よく成て船出し、壱里行てむかへしといふ処えとめ、夫より六里行て備後の白石え来る、この所より汐違、満潮は東へ行、干汐ハ西へ行なり、水島灘といふ難所、鯛、目はる多し、釣舟、地曳船多く出る、三里ゆきて鞆の湊へ着、けふは十里にて泊

水島灘



吹下す 靱のみなどの 朝風に
苦引かつく 海士の釣船

赤穂末崎



四月十三日

尾道

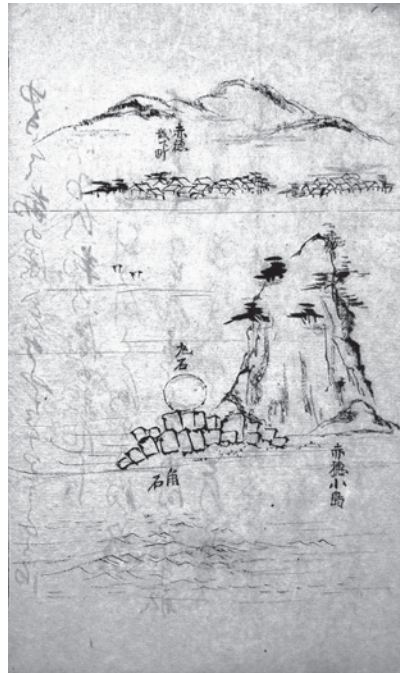
十三日 曇りて東風強く、卯の時過に船乗出す、申西の方へ向て一里行て矢の島、又式里行て備後田島、此処を火打灘(灘)といふ、式里はしりてゐんの島、備後おの道入口、鷺迎門といふ、四里行て安芸のうしといふ、壱里ゆけは忠海、又式里行てめはる崎へ着す、けふは十二里にて泊、暮比より雨降いたす

くれ毎に ともす湊の ともし火を
消して淋しき 雨の夜の風

赤穂城下町

四月十四日

御手洗



十四日 小雨、巳の半時に船のりだし、午末の方え向て式里行て、きのへといふ処え着く、松平安芸守より漕船廿七艘、水船式十四艘出す、午の時より雨はれて三里行き、御手洗へ来る、此処に御手洗観音堂あり、拝す

御手洗や 涼しく拝む 観世音

七里行て鹿老渡といふ島あり、山の裾は白石にして殊に絶景なり

島裾の 波に洗へる 白石を

夏まで残る 雪かと思ふ

津和

三里行て津和、此脇にふたかみとい

ふ島あり、家軒々二三軒有、此辺の

犬島 (因島)

島々は、南の方は大海ゆへ風つよく、

北の山かけに家造りて住也、弍里行

て周防ゆふ、(舟中)また三里ゆきて家室と

いふみなとへ、戌の時に着船す、け

ふは順風ゆえに二十三里乗て泊る、

娼家多く

此家(家室)といふはよき湊にて娼家多く、

価八九百六十四文のよし

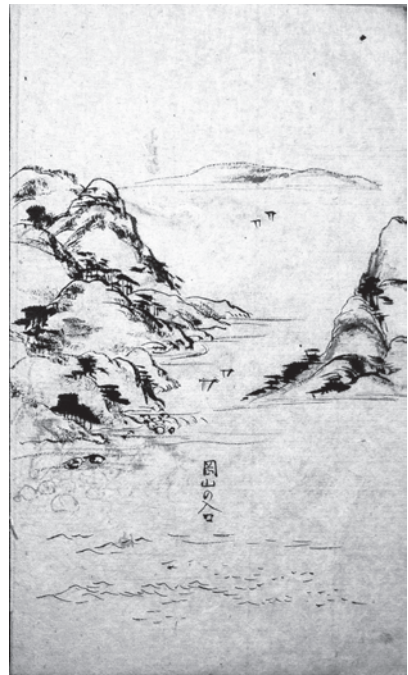
小豆島



備前京上藤



岡山の入口



四月十五日

十五日 北風、辰の時に船乗し、四里行て周防上荷え来りしころは、雨ふり出し、絶景也

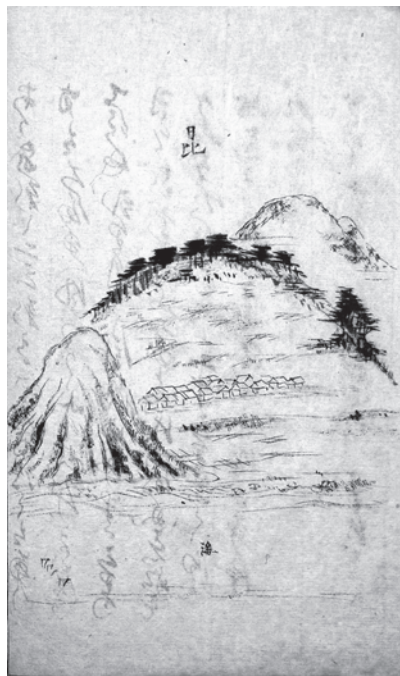
郭公 そらにむらたつ 雨雲を

つはさにかけて 今ぞ鳴なる

上の関

三里行て上の関へ着、けふは七里乗て泊

日比



四月十六日

十六日 曇、寅の時に船乗す、出船の時は案内にて法螺を吹けは、こゝな船出す、弐里行てそうし、この処より汐行替る、干汐は東へゆき、満汐は西へ行、不思議の汐合なり、三里行て室積、この辺を普賢灘といふ難所也、三里ゆきて、笠戸といふえ来りし比より空はれて、天気よ

く風出ければ、艫をあげ帆にてはしる、此船は風なき時ハ艫にてこく、船のみよし方に大太鼓釣りあるを、船静にこく時は地太鼓とて静に打、汐合により船急くときハ、せり太鼓とてはやめて打、此太鼓を鰐太鼓と云ふ、太鼓の音にて鰐船のそはへよらすといふ、三里ゆきて笠戸、四里ゆきてすくも、此辺の海ことに深く、式百尋も有よし、水色青く見へておそろしく覚へたり、壹里ゆきて馬島、四里行て向島、此日順風にて船走り早く、四里行て岩屋、壹里行て新島、三里行て長門の末崎、三里行て本山、此辺のしまくの絶景なれとも、船早けれハ凶しかたし、五里ゆきて豊前の部崎、北の方に乾珠、満珠といふ島あり、長日なれ共数里を来りければ、夕ッ方にもなりぬ、此辺の島々にて馳走として目当火焚く、其火細く立のほり、もの凄くも有けり、はや月も昇りて絶景なり、壹里行て田の浦、短夜なれば、亥の時も過くれと、風はいよゝよろしければ船はしる

行船や 寝るのはおしき 夏の月

夏の月 隈なくはれて 更る夜は

秋にも似たる 風そふきける

下の関

遊女の価

壹里行て長門下の関へ、子の時に着船す、けふは三十五里にて泊、此湊日本一の湊にて、大船百艘程もかゝりあれと、狭くも見えず、何風にても船繋きよし、娼家は軒をならへ、遊女の価は金壹分又は十匁のよし、平家の官女の遊女となりしゆへ、今に足袋をはくなり、下料の遊女は小舟に乗り大船え泊りに行き、朝は小舟をこき回り、かかれくと大声にて呼は、大船より遊女出、小舟に乗て帰る、衣類、縞、ちりめん、黒繻子の帯をしめ、いやしからぬ風俗、髪は

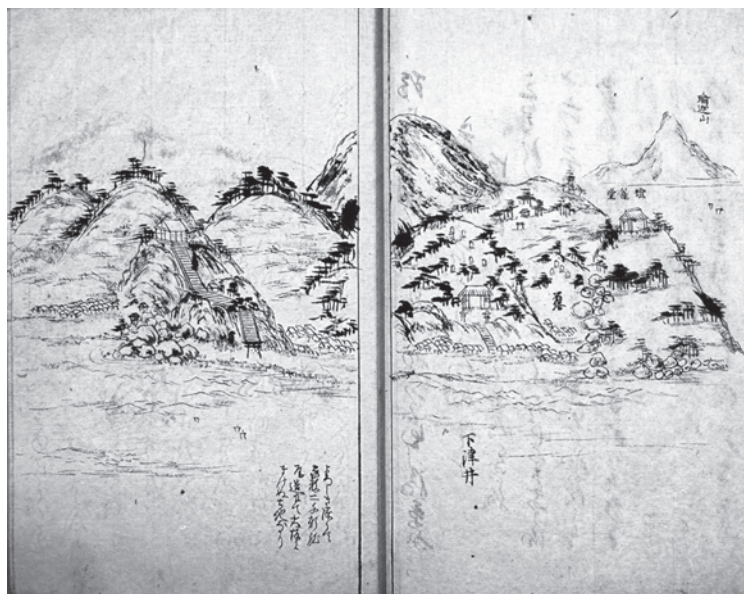
安徳帝

下津井

図のことし、価は貳百四十文のよし、お
 かしき価ゆへ船長に問しに、貳百文勤、
 四十文は朝夕の小舟の送り代といふ、平
 家の旧跡にて安徳帝、此海中に入水有し、
 尊骸を取揚、阿弥陀寺に葬る、陵の上に
 御廟を建て木像を安置し、其其外^{マモ}すへて
 平家の一門の画像委く有、天皇御誕生よ
 り御入水にいたるまでの盛衰、源平所々
 の合戦の有さまを、土佐絵にてくハしく
 図し、此寺に有、安徳帝の御剣其外宝物
 多し、此寺の祭りには、遊女駕籠に乗り
 参詣し、夫より祭り初る、境内に薄墨の
 松といふ古木有、安徳帝御歌

今ぞ知る 御裳川の 流には

水の底にも 都ありとは





三原城



上水島



四月十七日

十七日 大東風、出船見合、夕つかた申の時過より船乗出し、弐里行て豊前内裏浦、この所に波夜止茂大明神の社有、和布苳の社共いふ、毎年極月大晦日の夜、住吉の神主、波夜止茂神主丑の時比より海中に入りて雅海藻(マヤ)を茹て、元朝の供物に備ふと云、其時海中の水悉く干て陸となる、神事始る比より、神前は勿論百姓の家迄も灯火を消して闇夜とするゆへ、海水干すや、神秘にて分らす、内理浦といふ、平家屋島より此処迄逃、仮の皇居の跡なれば内裏といふ、今も小祠有て物哀也、平家の一族みな悉く西海の浪の花ときへし時、水死の一念蟹となるよし、此海中よりも平家蟹今に出る、壱里ゆきて小倉、門司ヶ関といふ名所有、文字の関とも書、柳ヶ浦清経入水の所、引島、大きな島にて、湊船付人家多し、船島、是をがんりう島と云ふ、

巖龍島

佐々木巖龍、この島にて宮本武蔵に討れしより巖龍島といふ、与次兵衛か瀬、これハ水かふりの岩なり、秀吉朝鮮征伐の時、船頭与次兵衛この岩え船を乗かけ、既にあやふき時、船頭与次兵衛切捨たるといふ、死骸(死め)うつめハ内裏の磯なり、印に松一本植置たりて、与次兵衛の松とて大木有、後の船此(マヤ)に石の難を除かんため、立石を印となすゆへ名処となる、戌の時に小倉の船着、紫川え着船す、上り場にて大篝を二夕所にて馳走に焚き白昼の如し、雨降り出し船よりあ

かりかね滞船す、大坂より小倉迄海上百三十六里を無難に船着てうれしさいはん方なし

百里来た 帆風涼しや 小倉船

四月十八日

十八日 大雨風にて小倉紫川に滞船

四月十九日

小笠原大膳大夫

十九日 晴天、巳の時に船よりあかり、

小笠原大膳大夫城下、宝丁^町銭屋忠助宅え

泊、居城は、慶長七年細川越中守忠興築、

寛永九年右近大夫忠真拝領、播州明石よ

り当地え所替、当大膳大夫忠固迄六代居

城、天保九年迄二百七年になる、大手向

午の方櫓数百四十八ヶ所、城付高十五万

石、六郡、企救^{キク}郡・田川郡・京都郡^{ミヤコ}・仲

津郡・築城郡・上毛郡、城下町東西六十

一丁、江戸まで海陸理数式百七五里^{マヤマ}、名

物絹縮・小倉木綿・革鍔・田野浦硯石・

大道火打・滋館・上野焼物・干小鯛・塩

雁・干鱧・鱺子・塩蛸

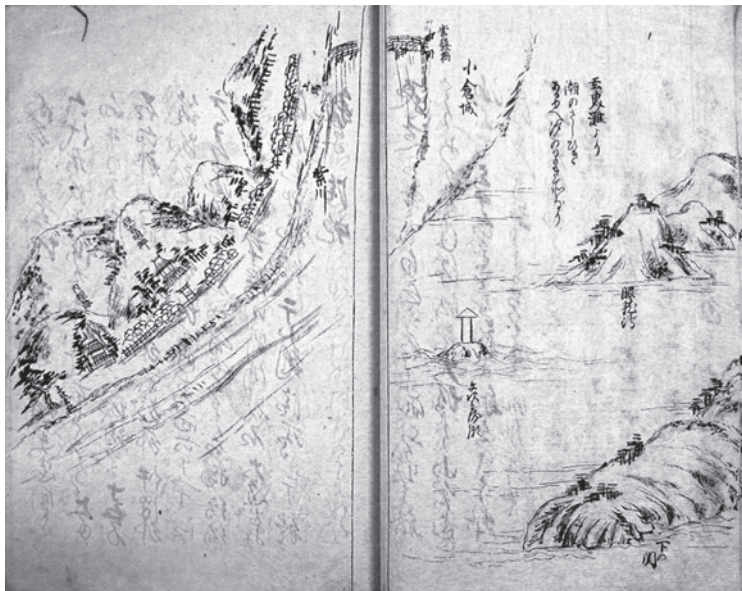
四月廿日

片野村

廿日 晴天、辰の時出立、片野村、右の

方にあたち山、ほはしら山有、南へ向て

行く、此所の女十五六歳にて木綿裾模様



曾根村

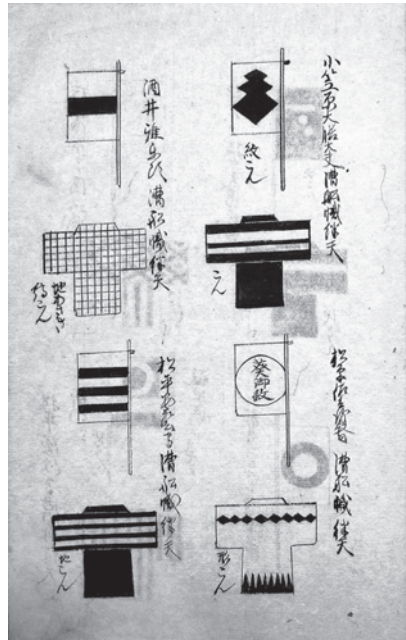
に茜染の裏を付る、髪は余程おかしきさまなり、水町村、松の木多し、蟬の啼を聞いて
松蟬に はしめて夏を 知る日哉

荻田村

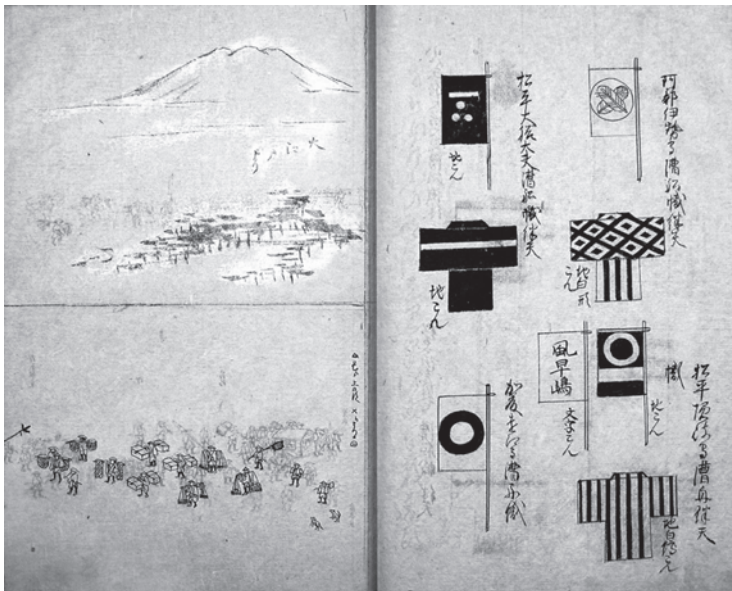
葛原村、右の方にしまつ山明神の森、左の方に八幡社、石鳥居たてたり、この所を少しゆきて
妙見山有、裏の山松多く絶景也、江筋川をわたり曾根村、塩浜にて景色好、この処景行天皇仮
の皇居の跡、帝踏石といふ大石あり、高さ弍間程、上平らかにして広さ三十畳敷程あり、今は
稲をこきて此石の上に干す、御後の陵有、曾根村、新屋甚兵衛方にて昼休、それより狸峠とい
ふ山を行く、この山はぬりはし草沢山有、荻田村、松屋五郎右衛門方え泊、けふの道法三里半、
此国里数違ひ、五十町亦是七十町壺里なり、松屋の宅は座敷より海を見わたす、沖の方に鴻の
島といふ島有、百合若大臣の愛せし鷹を放せしより、今に鷹多し、弁天社ありて、江のしまの
如きの島といふ、ことに絶景、此辺の牛は大きな声にて啼、夜分などは耳に付て寝かぬる程
にたへすなくなり



小笠原大膳大夫漕船幟絆天



酒井雅楽頭漕船幟絆天



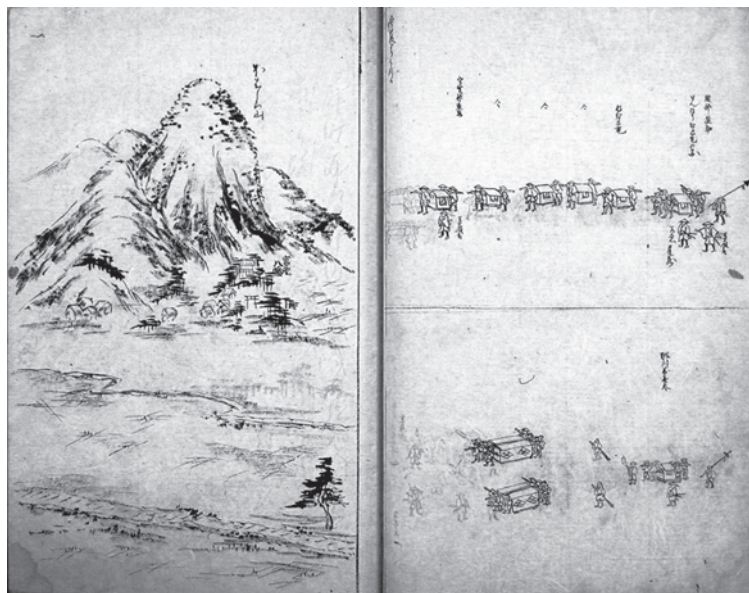
△是ヨリ上の段×えうつる○

案内



小松原尉之進

◎△下段よりうつる



服部莊助

妙見山

四月廿一日

廿一日 晴天ゆへ、海より旭の昇るを床のうちに見ながら起出たり

すみ馴て 鳥のほとりに 鳴く鷹の

声より今朝の 雲はれにけり

彦山

辰の時出立、馬場村、南原村、右の方にさくそう寺といふ山有、彦山の配下にて住職は山伏に

山伏

て、山の内に穴あり、山伏を案内に頼めは松明をつけて穴へ這入る、二丁程ゆけハ流れあり、

広さ二丁程もいり、流より先へハ案内者も行かす、蝙蝠多し

蝙蝠は しりてや居らん 穴の奥

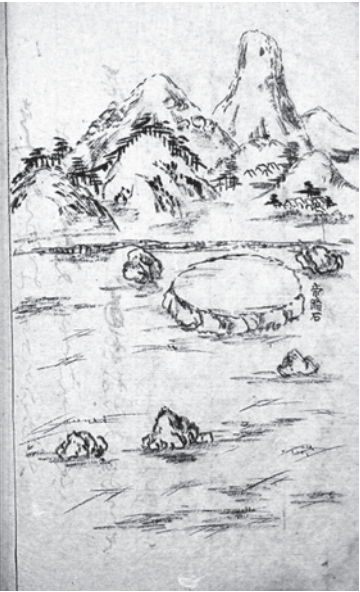


京都郡

尾倉村八幡社有、与原村、おワセ川といふ小川を渡、下津熊村、熊橋をわたる、此辺見物男女多く出る、西の方へ向て行黒田村、此辺景行天皇の仮の皇居跡あり、夫ゆへ京都郡といふ、米屋十蔵宅え泊る、けふの道三里半



帝踏石



しまつ山



明神か森

四月廿二日
上野村

廿二日 辰の時出立し、上久保村、此辺女の髪、五六十歳の女も島田毛巻、新町村、小橋をわたる、上野村

松蟬に はしめて夏を 知る日哉

左の方障子ヶ嶽、七曲り峠登り口へかゝる、此辺の山へは牛を放し遊ハせおく、親牛へ犢四五疋つれて草を喰ふか珍らしと

夏草は 遊ぶ犢に ふまれけり

香春町

此山難所絶すに、千葉上野介常胤城跡、五丁下りて香春町、一の嶽、二の嶽、三の嶽とて高さ十三丁ほとこの山有、むかし景行天皇九州征伐の時、この峰を御覽あり、香春不二とて御製

はからずも つくしの旅の 道すから

富士を香春の 里に見んとは

夫より香春不二といふ、香春明神の社有、けふの道式里十二丁にて、米屋清右衛門宅え泊、此所七十丁壱里、此山は方牙石の塊の山にて白石の山也、昔はこの山海えか、やきて漁獵なし、今は松、杉生茂り獵のさはりなし

夏もまた 残りし雪か 一の嶽

細川中務大夫

細川中務大夫の城跡、此城責^せけれとも落す、山の裏に五徳村といふ有、此村の者閑道を教へしによりて落城す、今にこの邨支離者所は癩病多しといふ

千葉上野介常胤城跡

四月廿三日

上野焼

廿三日

辰の時出立、夏吉村、丑の方を向行、上伊方村、此辺赤またら土也、赤城村、あらさ

この池、右の方に岩屋権現社あり、石花表、よろしき宮、木船の池といふ用水あり、上野村、

上野村、上野焼竈有て色々焼出す、常福といふ池有、福地権現社、赤池村、赤池川、小倉え年



あつしあふあゆみかたのまきし

弓削田村

貢米をつミ出す川也、此川は船橋かゝる、船七十艘を横に並へて上板をならへ、土を置、両のふちへ芝を付竹の手摺、ことに立派奇麗也、河原、弓削田村、櫛の木多し、壺反にて実四斗くらひ取れるよし、宮尾村、地蔵坂、鰯峠、伊田邨、地蔵か鼻とて岩の上に地蔵有、赤松坂、松斗り多し、夏吉村、山の間より石炭といふものを掘り出す、炭の如く黒く、つやある石のやうなるものなり、此辺の百姓焚ものとす、拍子木くらひか三本もあれハ、飯一釜は焚けるよし、くさき事かきりなし

石炭の 穴や夏さへ 寒き風

香春

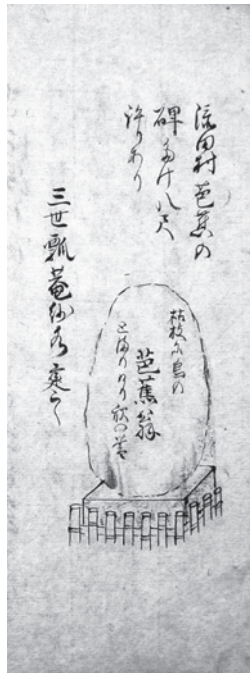
香春丁、米屋清右衛門宅え再泊、けふ道のり五里半、此辺五十壺里^(マ)

四月廿四日

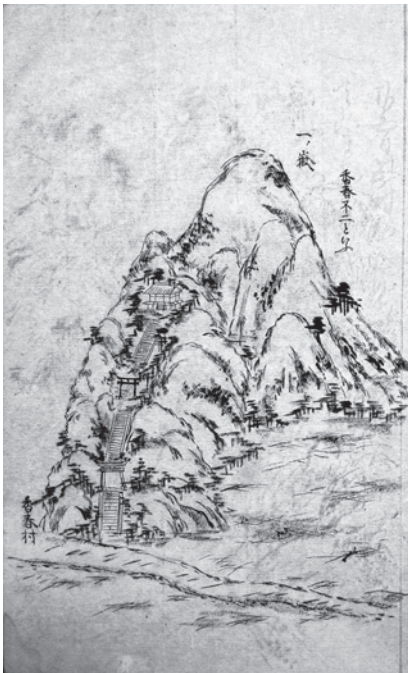
猪藤村

廿四日 晴天、辰の時出立、南へ向て行、下香村、鉄砲丁、上伊田町、下伊田町、新丁、後藤寺丁とてよき町をとふり、西の方へ向て行、さんかい橋を渡り、猪藤村天神の小社、河崎峠を登りゆく、此辺水の手よきゆへ棚田多し、辰へ向て行き河崎村、櫛の木多し、ミな大木ゆへ、壺本にて二十斤も実取れるよし、雨降明神の社、祭礼六月十八日、金能ヶ原といふ一里半の原を行、寅の方を向て行く、この辺櫛多し、庄村草切峠といふ難所えかゝり、草切橋をわたる、添田町、宮崎善兵衛宅え泊、けふの道法五里十八町、五十丁壺里

添田村芭蕉の碑



香春不二



四月廿五日
彦山の山伏

廿五日 五時出立、野田村入口に大木の杉、竹にてこま寄せして有、彦山の山伏、行中の札所といふ、辰へ向て升田村^(新)、広渡り橋、右の方に妙見神社あり、木鳥居、額堂三十六歌仙額有、筆者しれされとも古画にて面白し、二股川、此辺谷川にて竹茂り山々は藤花さかりにて、絶景

山藤の 四月へ伸ひし 閏年

彦山の入口

秀吉九州征伐

彦山入口、象ヶ嶽上仏成といふ入定の地あり、右の方に建石あり、亥の方え向て山え登る、坂本、肥前龍蔵寺和尚入定地、蓮花台といふ、彦山坊中の女髮型、ちりめん裾模様、御殿女中の如し、彦山楼内山伏、黒衣篠掛一刀を差し、さもいかめしき躰也、彦山は九州第一の高山にて豊前・豊後・筑前に跨るといへとも、三所権現の社、諸堂は豊前の地にあれば、豊前の彦山と称す、むかしハ食地万石余、山の布持方七里を領して三千八百余坊、弘治・元龜年中迄も千余もありしに、秀吉九州征伐の時、当山の衆徒島津家に属し、秀吉の下知に応せず、依之食代ごとくく召放さる、によつて、夫よりいつとなく寺院減して、今はやうく坊数式百四十五軒、庵室百廿軒、坂本町五十八軒、男九百四十六人、女七百六十人、彦山総人数天台宗山伏にて、座主と称するは山の長さなり、座主は大僧正まではず、む、領主の小笠腸大膳大夫在城の時は年頭の礼請らる、其時は敷居を隔て礼あり、挨拶すみて敷居の内え入り盃事あり、退城の節は一步送るよし、求菩提山座主は権僧正迄す、む、年頭の取扱は小倉番頭の次席の由、彦山の銅華表有、高さ数丈、大き(サ)二タ抱あり、額は靈元院御宸筆にて英彦山と金字、往古は日子山と書し山なり、今また英の字を加へて英彦山と称す、華表の銘には鍋島信濃守勝茂建立とあ

銅鳥居

り、佐賀の農祖平右衛門いまた小身の時、彦山を信して靈験を蒙しゆへ、諸堂廢壞すれば再興ある事にて寄付米有、この華表は他国にある銅鳥居とハ異にして、うち空虚ならずことくく銅にて製せしとりゐにて、銅の入し価はおひたし、土人の云ひしは鍋島の五万石の物成にて出来たりと云、誠に海内一の鳥居といふへし、是より上宮まで五十八丁、般若堀まで五十丁、伐木石まで七十町、豊前坊まで六十町、左右に大木覆ひかゝり、中にも坊中の門前は桜木数千本有、華表の前下馬札有、是ハ座主より建る、下乗札は小笠原家より建るなり、銅鳥居より講堂まで十八丁、講堂には丈余の阿弥陀二体、丈斗の不動あり、講堂前に石のとりい有、是より絶頂まで四十二町、鎖にすかりて漸々登る、祭神は伊弉諾尊を第一とす、講堂の脇に桜あり、山の谷々廿五谷、彦山の向は戌の方を正面とす、東西弍里、南北二里半、山のめぐり十里、祭礼ハ二月十四日、十五日なり、祭式さまざまあり、中にも流鏑馬古雅なり、小倉より千石、熊本より百石、祭礼料として付て有、宝物品々あれとも神功皇宮の兜を一の宝物とす、年数は人王第十代崇神天皇乙酉年より天保九戌年まで千九百三十六稔になる

彦山宝物

彦山宝物二面兜の由来

神功皇后

人皇十五代神功皇后先帝の御遺志を継、三韓征伐に赴きし時、長門国豊浦の宮にて、武内大臣に仰せて甲冑を造る、芦原の醜男しごをの面に倣へいかめしき兜を製、筑前粕屋郡にて初て甲冑を召させ給ふ、御凱陣の時彦山に納め、其後御鎧は天正の兵火に失ひ、兜はかり残る、三韓征伐の

二股川

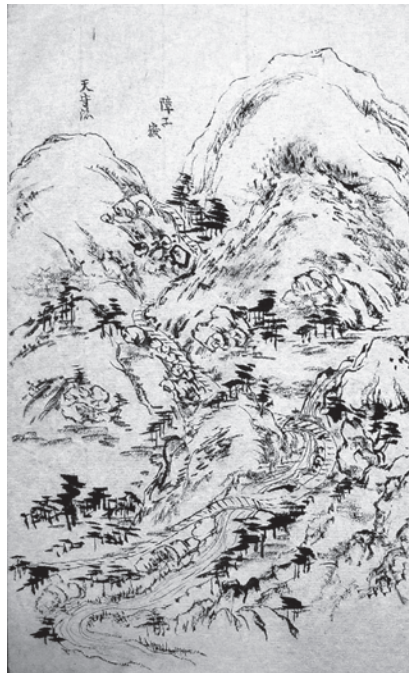


上津野村

時、応神天皇を御懐胎の事なれば、二代の天子召させ御勝利有し兜なれば、天神無双の神器なり、其後養老四年大隅隼人反逆の時、宇佐八幡の神託（託）を蒙り、豊前国主宇努首男人此兜を着し、賊徒忽亡び失せぬ、亦蒙古襲ひ来るときも奇異の靈験を現し、国家を鎮護し給ふ、彦山を下り七大童子の社有、上津野村、七々手石山を坂を下り下津野村、丸ふち橋を子え向て行き、百姓惣兵衛宅え泊、けふの道法五里半

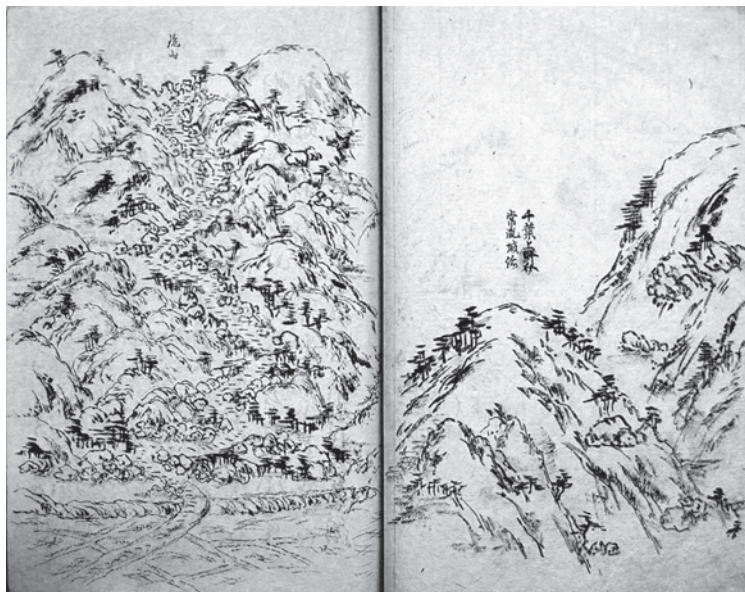


天守跡

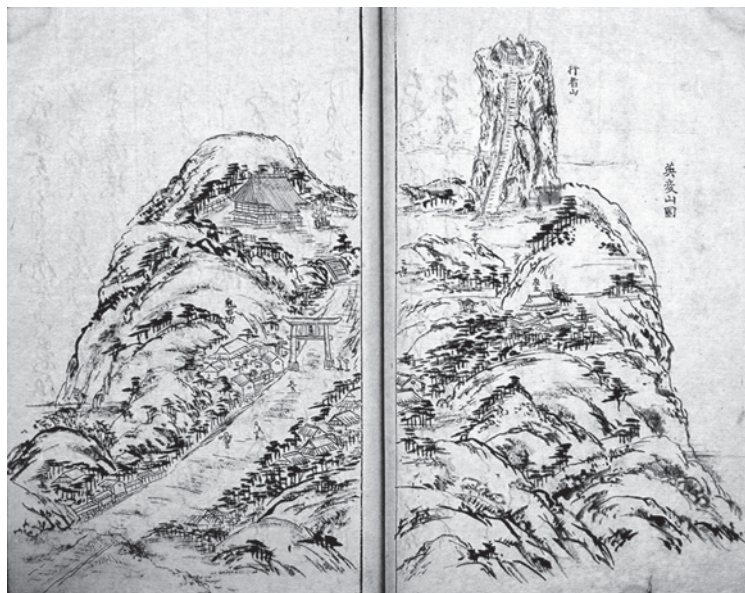


障子嶽

鏡山



千葉上野介常胤城跡



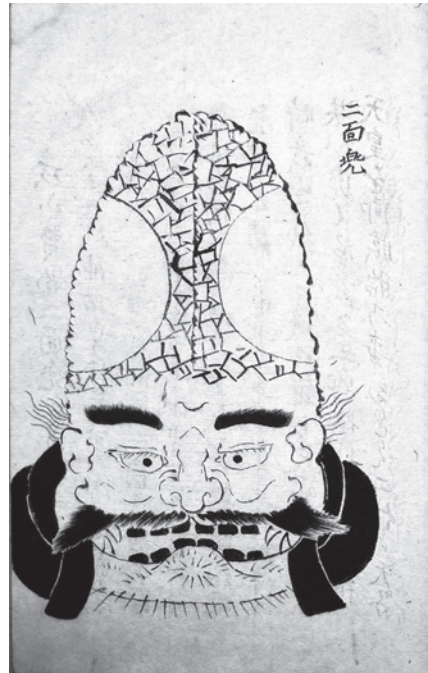
英彦山園

二面兜

四月廿六日

赤村

廿六日 辰の時出立、北へ向てゆく、大峰川、橋を渡る、大行事の社有、祭神ハ栲幡姫命・高皇産靈尊・少彦名命なり、あふら坂右に猿田彦大神の石有、山赤村、かんぜきか嶽、毛利久八郎城跡、才の原と云ふ広野を行き、上赤村、下赤村をとふり、山浦村、右の方に光明八幡、左に祇園社有、赤川橋をわたり、戸城山、応永二年菊地肥後前司武重居城、其後馬屋原左馬助元方、天正五年三月廿六日落城のよし、今は城跡のミ残、油須原、此辺ミな石山にて川々も大石あり、卯の方え向て此処を行く、兜岩、石坂といふ難所越へ崎山村、右に一尾八幡有、築瀬村、山鹿村、大村、本陣雄平宅え泊る、けふの道法三里十二丁、五十丁壱里



兜岩

四月廿七日
花熊村

廿七日 辰の時出立、北へ向て行き、花熊村、馬ヶ嶽、長野三郎左衛門の城跡、大友と合戦、落城す、此処に御所といふ山有、新田義氏の城跡、才の原、清水の池、あもふた橋、長さ三十五間有、左にしき山、松田の池といふ壺丁四方の大池有、此辺の田の用水なり、清水ヶ原といふ広き原有、此処に兜塚、茶臼塚、長養の池とて四丁七反町の池有、是と並て泉の池といふ有、七丁程池有、この池に添て行、八景山とてつゝじ多き山有て絶景

咲ミちて 夕日か、やく、岩つゝし

紅ふかき 山のした水

毛氈を 山へ敷しか 咲くつゝし



国作村

築城村

国作村に熾石とて祇園へ納めし熾の跡付たる石あり、條法寺山、木舟の能有、有久川橋三十二間有、些見村、高尾の池一丁程、国留の池、ひろさ六反程有、此処池水に田畑をやしなふ、別府村、築城村をゆき、中村にたつ川といふをわたり、高塚村、椎田村治平宅え泊、けふの道法四里十二丁



四月廿八日

宇津宮紀伊守

八屋村

宇の島

奥平大膳大夫

中津城下町

黒田如水

廿八日 小雨、辰の時出立、卯の方へ向て行く、綱敷天神のやしろあり、湊村きんとめ八幡の

社有、石の鳥居たてたり、此辺左の方は海にて御塚といふ島見へて絶景、築城郡寒田村、紀伊

谷といふ所に宇津宮紀伊守古城跡、右の方に道祖本さまもといふ宮あり、左に石堂村、福岡村、此辺

海辺にて蛸焼竈あり、図、松江橋をわたり、四郎丸村、広山、八屋村、中川橋をわたる、此処

入船の船着よき所也、右の方に宇の島といふあり、天明の比迄は家もなき島なりしか、四五年

以前より別て人家多くなり、今は家七百六十五軒、男七百八十九人、女百八十三人、富貴の島

なり、赤熊村、今市村、恒留村、沓川村を過て、奥平大善大夫領分入口猶江村、あい川を渡、

鈴熊の森、広津、子犬丸、邨川渡し、障子船、奥平家より出す、鮎野丸、高瀬川を渡る、は、

五十間、中津城下町、子祝屋次兵衛宅え泊る、けふの道法（まじり）二里、此夜ははしめて罫（まじり）を釣、蚊

多し

四月から 蚊はしら立や 中津領

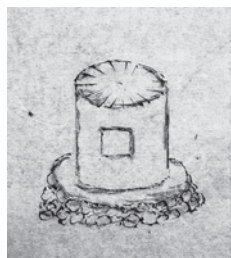
此所町繁昌、小倉城下におとる事なし、女の髪はふくわけ、口紅粉

を濃く真中へ少し付る、中津城築は黒田如水なり、其後慶長五年細

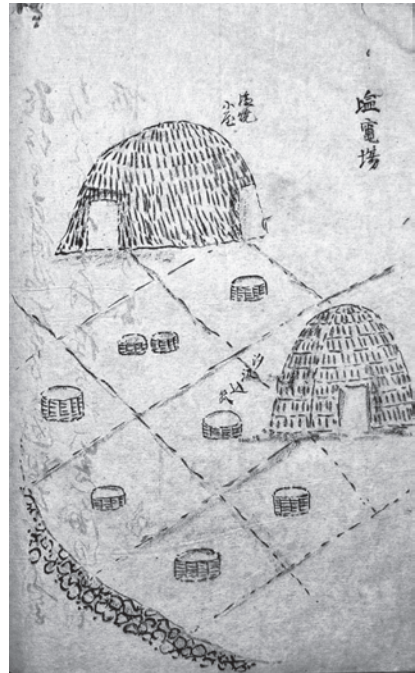
川越中守忠興、寛永九年小笠原信濃守長次、同内匠頭長勝、同修理

大夫長胤、元禄十三年同信濃守長国、同造酒介長邕（まじり）、享保二年奥平

大膳大夫昌成、已後代々居城、高十万石、江戸迄式百六十八里



塩竈場



四月廿九日

廿九日 小雨、辰の時出立、未の方へ向て行、八行山といふ山有、中津より藍原迄壺里、坂手

の隈とて少し百姓屋有、此辺カヤといふ蘇鉄に似たるもの有り、佐知村、高瀬川を渡り、左の

方に翁屋敷とて、大貞公の地守の翁三百歳まで住居の由、七社宮有、旧宮にて石鳥居たてたり、

南へ向て行土田村、地高の畠有、古城跡、城主しれす、臼木村手斧建八幡社有、鳥居ヶ原、宇

佐八幡社造営の時、此処にて手斧始有し由、手斧建坂といふ有、高瀬川渡、ひだ川弘山鮎返り

とて家六七軒有、この所山も川もミな岩にて、瀧所々に有、障子岩、中河原、屋形山、弘法筆

投岩、樋田村、家四十一軒、百姓宗八宅え泊、けふの道法三里六十四丁八間、此村の流行唄

高瀬川

障子岩

酒屋男とねんころすれは 蔵の窓か
ら粕なくる ヨイヤサ く

さまはきたれと 出るこたならん

庭にしのハレ二度なけた 庭にしの

ハレ二度なけよりも 日よりやよい

かと出てこされ ヨイヤサ く

愛のこむきもちや 九ツなから

さまに九ツわしやなから

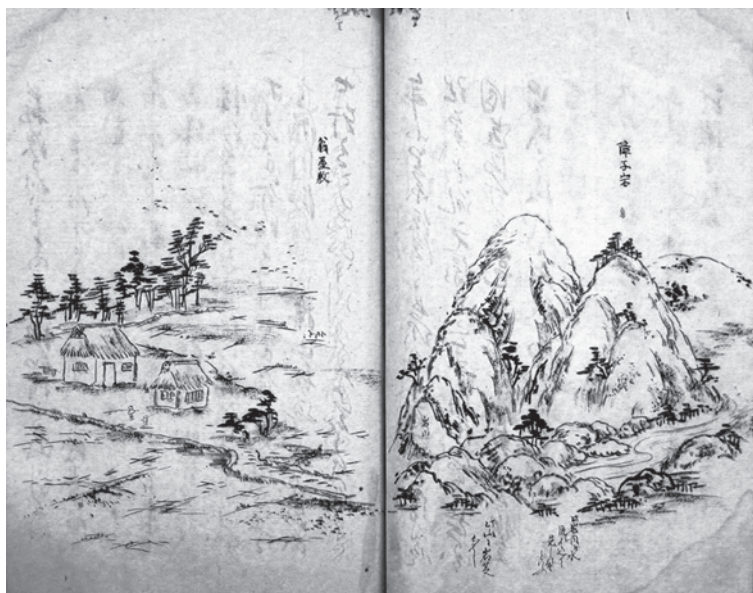
ヨイヤサア く

樋田村
翁屋敷

樋田村は、山の間にて郭公早く、此夜は
しめて時鳥を聞て

卯の花の 白きを夏の 雲と見て

う月に早く 鳴くほととぎす



四月晦日

高瀬村

晦日 辰の時出立、卯の方へ向て行、きのふ来し道を帰り、鳥居原、唐原、この処わたし場、

鵜来石有、高瀬村古歌有

豊国の 高瀬の川の 川上に

鵜来る石の なかれざるもの

池永村、將軍塚、西征將軍(親王)快良親王御塚 御製

雲井にも のほるへき身の 地に落て

雲雀の床に 音をのみそなく

臼木村、真坂山、この処より嵐出る、名所古歌

豊国の 真坂の洞の 朝あらし

こころして乗れ 沖津船人

永添村

永添村式ヶ所、津民長岩の城主野中兵庫守鎮兼旗下、末広主膳正行居城壱ヶ所は、当国田河郡
岩石の城主、高橋三河守長幸の幕下、小城源兵衛重道居城跡に松尾宮といふ小祠有、大貞村薦
社八幡、伊勢、宇佐二所皇大神と奉仰、八幡宮御神躰出現根本の地なり、領主より式百石寄付、
薦蒨会ノ神事、放生会執行、寛永十七年はじめて能寄進有、大貞社神主池永伯耆守、大貞三角
池は応神天皇御出現の処なり、八幡宮神託に

大貞や 三角の池の 真菰草

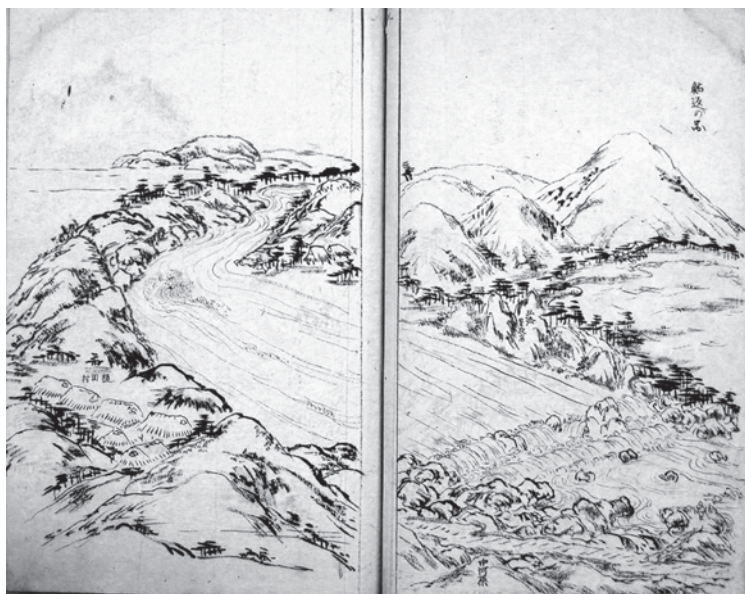
何を種にて はらみ生ふらん

手斧建八幡宮



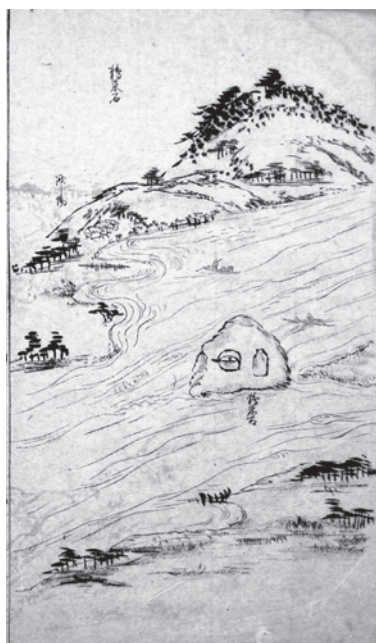
四日市村

正行寺といふ寺、古城跡の由、城主しれす、大悟法村、福島村、草葉甲斐守城跡、伊藤田橋をわたり、右の方に八面山、飛永の池、橋坊といふ地藏堂有、此処を少し行きて藪の中に矢立八幡宮有、鋪田村、大根川村、赤尾村、赤尾左衛門大夫方胤城跡有、実川橋をワたる、川え人入りて橋をおさへて渡す、小笠原下総守領分久多村、諸口坂、この処に十三塚といふ小山有、何ゆへ十三塚といふや、訳里人も知らず、奥平領分境より案内の者引取、寺西蔵太御代官所四日市村入口、辰へ向て行、東の方に周防灘見へて絶景、宿の入口左の方に寺西陣屋有、四日市村百姓市郎右衛門宅え泊、けふの道法五里廿丁



鮎返の図

鵜来石



閏四月朔日

閏四月朔日 辰の時過出立、閤村

ひととせの 行をはやしと おしむ間に

またも卯月に 逢そうれしき

羅漢寺

曾木村羅漢寺鎖戸といふは、五六十年以前に江戸浅草辺の六十六部の善海といひしもの来りて、山のほりぬきやすき事を見、石工をやとひ東の穴道百二十余間、高九尺、横は、八尺余、所々にあかり取のまどを明て、通行安きやうにせし事なり、此洞穴は、富士の人穴とちかひ、人工の作る大細工なれハ、誠に面白き絶妙の地なり、諸国奇異の地有といへとも山の底をとふる往還更になし、西の穴道ワつかに三間はかりなり、此穴道を往来する者、壱人に四文、牛馬は八文ツ、取しに、善海房、後には百金の貯へも出来、羅漢寺にてをはりしとそ、法鏡寺村、右に駅館川といふ川橋を渡る、縁合坂余程難所を越、松平主殿頭領分、左に平松と云松二本有り、宇佐村、石の井戸有、化粧水といふ、宇佐八幡宮八月二日より晦日まで祭り有、其節神輿を此平松の処まで出輿ある、又井大村に古要といふ神、小祝村に小兵といふ神も、平松まで出て放生会の式ある、その時二神井戸にて化粧し給ふと云、この咄し宇佐大宮司より聞ぬ、宇佐八幡へ参詣す、石の華表より両頬、石灯笼八十本、元文、元禄の年号彫付有、大樹数千本茂る、石壇を壱丁程登り、本社正面に宇佐宮、右の宮ハ神功皇后、左りの宮ハ幡大菩薩なり、宮はさのミ大社にはなく、神楽堂にて宝物を見る

禁中御奉納

同断

一、仁風一覽

一、金銀御幣

同断

一、御束帯

同断

一、玉纏御剣

一、後鳥羽院勅作剣

一、一條院勅作剣

一、行平 作豊後国行平と有

一、雌雄の剣 塩谷大四郎奉納

一、竜宮よりあかりし鐘

同断

一、金銀のノへ板（延べ） 金三枚 銀三枚

一、神息 銘山城守藤原近則

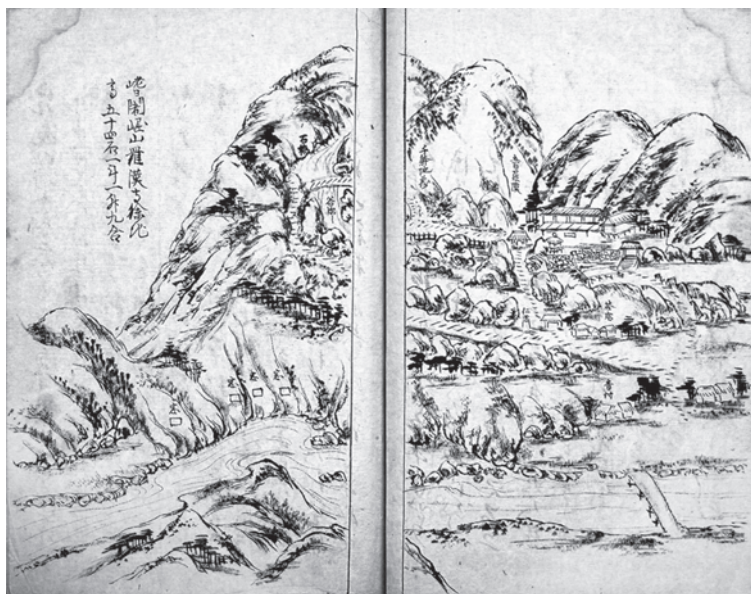
一、庖丁正宗 山口又左衛門尉忠為奉納

一、行平 作豊州住紀新太郎行平と有

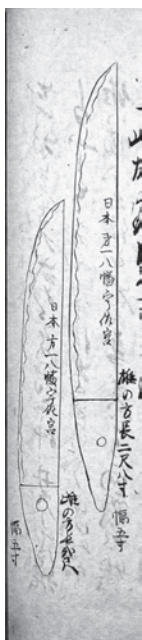
一、高麗王太刀 黒田甲斐守奉納

いつれも宝物美事なり、一の神職を宮城大宮司といふ、其次を到津大宮司といふ、御朱印高千石、此内四百六十四石諸事修理料、五百三十六石は本社中配当、上中下社家三百六十余人、内僧四十余人、御朱印配当寺社住宮の分七十九軒、神社仏閣大小百余宇、今現在六十余宇、大小神事八十余度の内、当分執行式十余度、新生会八月、新米を備へ式有、正月十三日新行会、六月晦日御祓の神事、九月廿日より廿六日迄祭有、此内一日芝居、一日市、宇佐宮炎上享保八年也、其後、公儀より銀五百枚御寄進、其外日本國中奉加御免にて、如前々造宮、右三殿皆造、元文五年より天保九年迄九十九年余になる、この辺の女の髪、割島田、和木村を過、猫橋をわたり山村川有、新規立派なる橋をかけたたり、向栗山蒨宇田邨、辻村、東大堀村、この所豊前・豊後の国さかひなり

女の髪



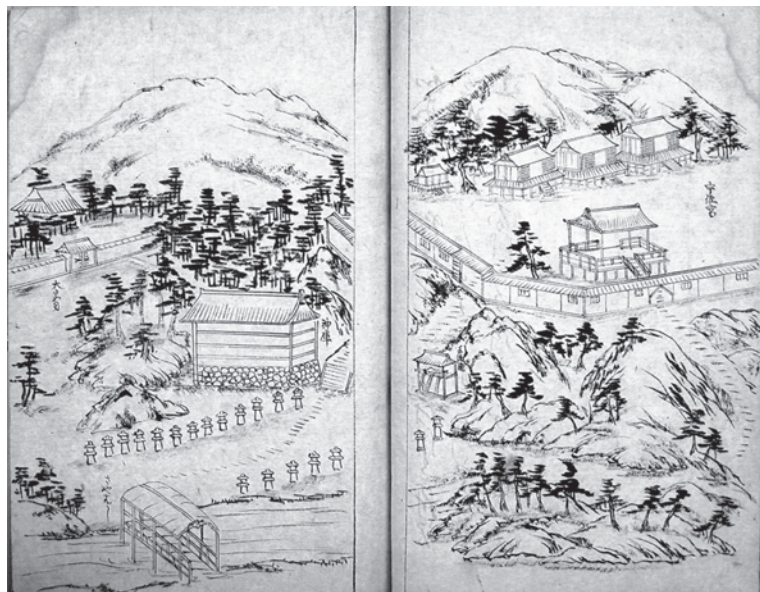
羅漢寺



日本第一八幡宇佐宮



宇佐宮



【表紙】

江戸ヨリ大坂迄巡行記 豊後巡行記 井二大坂ヨリ 海上豊前迄 三 巡行記				
--	--	--	--	--

豊後国国東郡

高田村

小湊

豊後国国東郡犬田村、右の方くり山といふ有、寅へ向て行、丑の方に海見ゆる、斜塚といふ山有、田植橋を渡、下来縄村、鎌倉山応利山清恩寺と云寺有、上來縄村を過、高田村大庄屋高田源助宅へ泊、けふの道法三里、見物多し、女ハ島田、江戸のとふりにて少し大鬘也、縮緬太織を着す、身きれい、此辺ハ海辺にて船着の小湊故繁昌す

閏四月二日

二日 辰の時宿を立出、巳の方へ向て行、桂川を渡る、橋新規、芝崎村、田福村を北へ向て行、草地村、さいの神坂余程の山坂也、此所夏様草多し、花盛ニて山ハ紫幕を張たる如也

かこ草や 花紫の 法の雲

此山に大石有、遠見石と云て周防灘を見下す、総ヶ谷難所、鼻田平と云米の山、大平村左の方
に新開猫石といふ大石有、金谷村、此辺は暖国にて、蘇鉄山にも庭にも大樹有て、ミねの葉青々

として霜除もせぬさま也、山野の芒ハ冬枯もせず、大村を過て庄屋村、夜楽の坂難所、寅卯の間へ向て行六丁登る、右の方にいのむ山とて高山有、西畑村を過、白野村弥九郎松といふ大樹、
訳八里人も知らず、横内村迄五丁下る、東を向て式丁登る、此処道幅三間程、両ふちへ岩芝を並へ植付たり、堅木村カキより式丁下り、小畑村より又登る、丑寅の方を向て行、此処石多く山も畑のへりも石を並へ、中にハ八畳敷程の石も沢山有、小畑の坂羽根村迄三四丁登る、氣先といふ建場より下る大難所、佐古村を亥へ向て行き、二丁ほと下り、佐古川を渡、川の測を北へ向て行き又東へ向て行、右の方に山の神の祠有、安永の年号の石燈籠二本、治定坂大難所を十町登り見目村、丑寅の間を向て六丁下る、此山は絶頂は雲の中にて三丁下りて雲を出る、みめ川を渡又六丁登る、豆木平延岡領境杭、絶頂竹田津村、此辺ハ石多き故田畑の境目は丸石を組し石垣にし、きまりよき土地也、山国ゆへか作物の実入よし、けふハ麦を茹て家々毎に連架打をせしぬ、榮福寺へ泊、仮亭主安左衛門、けふの道法四里半

竹田津村

閏四月三日

野田越

三日 巳の時宿を立出、寅へ向て一丁登り鬼籠^{キロ}村より一丁下る、卯辰を向て式丁登りひさげ原、櫛^{クシノミ}海村より二丁下り寅卯を向て七丁登る、難所、是を野田越といふ、絶頂を大平の辻と云、五丁下る、此辺大木繁り日の影遠きゆへ山の石、大木の根に豆蔞多く付て美事也、土人石豆といふ、千燈村、酉の方を向て行、鷲巢山の下を行、伊見川、伊田川をわたり、右の方に鎧岩といふ大石有、西、黒木大山を見ながら赤根村、かりまた岩、此辺猿多し

兜南 夏から咲くや 鎧岩

姫島

卯辰の間を向て二十丁登り山祇神、大山神の社有、霜月申の日祭礼、少し行て天満宮社有、祭り日六月廿五日、三社とも大石鳥居建つ、立派の社也、此処は畑越といふ、大難所を行、豊前国ハ諸鳥とも少く、豊後の国は鳥多き土地なれとも、此山は諸鳥別て多く、鷲、ひよ鳥、時鳥、筒鳥ミな一時に鳴、面白し、岩戸村、葛原にて少し休む、向の方に熊の嶽といふ山有、久の浦、此所は絶景、沖に姫島見ゆる

わたつみの けふはくまなく はれ渡り、

姫の島まで 近く見えける

富来村

此山は、登る時ハ雲に入り昇天するかと思ひ、下る時ハ井戸にも入かと思ふ程の険阻也、富来



文殊堂

村を下りて文殊、中の坊にて昼の餉し、峨眉山文殊仙寺へ参詣すとて、山へのほるに大鳥居、是より三丁登り文殊堂、岩をくりぬき御堂を建たり、奥の院へ案内の僧、灯を持って先に立、岩穴へ這入ること二十歩斗りにて門有、其内に岩より一滴つゝの冷水落る、此水を吞は病難なし、智慧を増といふ、此文殊菩薩ハ、昔行者入唐有し時、五台山に参詣す、文殊出現有て宜く、我日本へ行て愚痴の衆生に智慧、福寿を与へんと思ふ、もし此山に似たる山有やと宣ふ、行者答て、西海豊後国六つ山、廿八谷の内、峨眉山と申て、此山に少しも劣らぬ山有り、菩薩御光臨あれかしと誓約有、嵯峨天皇弘仁十二年に帰朝して、此山に入て待給ふ、文殊菩薩知劍をたれ、獅子に乗て紫雲の中より出現有て、此山奥の岩屋に入せ給ふ、日本三文殊の随一也、三十一年目には開帳有り、巡見有年は年限の外開帳す、文殊仙寺は領主より地方にて八石、外に燈明料として五石、都合十三石、今の別当は放光院といふ江戸の築土八幡別当普門寺弟子の由、文殊仙寺拜礼仕舞て此寺を出ぬ、地藏賀尾といふ峠を廿九丁登る、大難所、片方ハ数丈の谷也、谷の岩間に白き花の海老根、岩菜多く咲て美し

えびね咲 山の難所や まかる腰

大友義近の城跡

成仏村、山間麦畑多く、棚田も有、水の手ハ山より出る清水を引て苗の生立もよし、右の方に
おとくれ山とて、大友義近の城跡、申え向て登る、針の耳といふ山、二子山、旗の尾の難所を
越て山の頂にて夕つ方になりぬ、景色いとよし、竹松明を灯し段々に壺里程下る、同勢の人足
式千人も有しか、銘々松明を持山を下るさまは、夜軍もかくやと思ふ計也、富永村迄下りて山

富永村

を見返れハ、狐火か螢の如し、漸々山を下りて田の流れにハ蛙鳴き螢飛、きりくす、キナヅラト云、高追虫、色々の虫鳴き、まことに風流、涙のこぼるゝはかり也

蛙なき 虫なき螢 飛ぶ夜かな

かたまりて 夜光の玉か 田の螢

螢とふ 影を呑気か 田の蛙

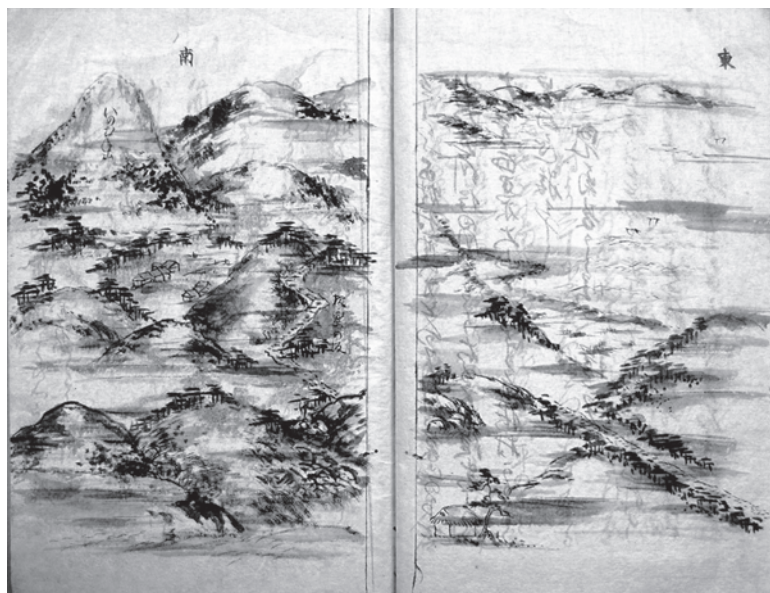
三日月の山の端に出けれハ

谷底の 水にも月や 山に月

田の水へ うつりて光る ほたるさへ

しらみて見ゆる 宵の月かけ

富永村仁左衛門宅え四ツ時着、泊



竹田津村

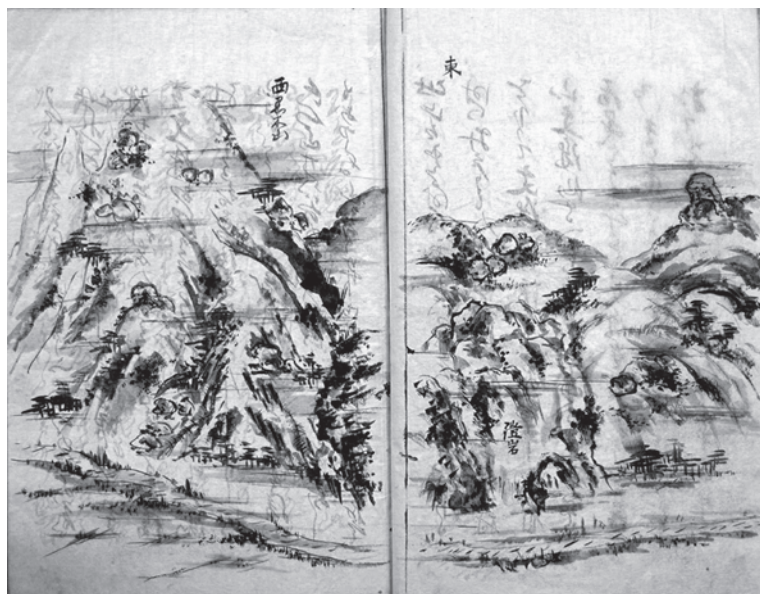


周防灘

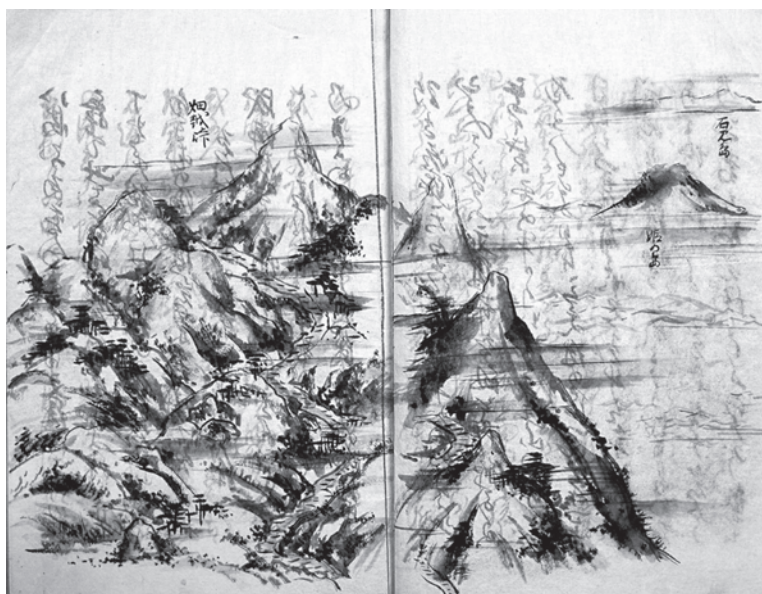
尻つき山



西黒木山



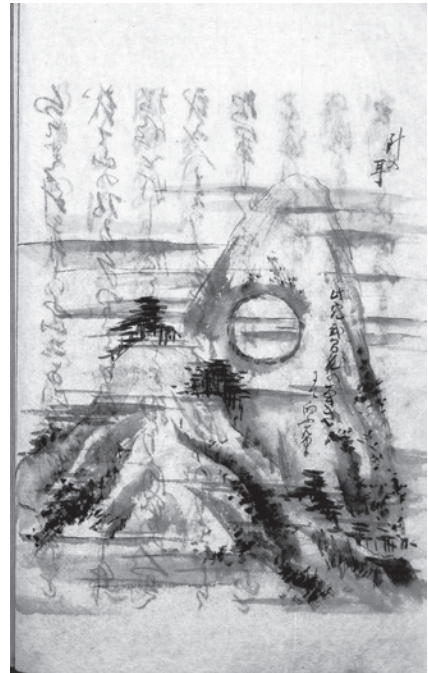
畑越峠



姫の島

閏四月四日

杵築城



四日 辰の半時宿を出、巳午の間を向て行き山へ登る、此辺萩多し、弁分村地藏院といふ寺有、弁分川を渡り亥子より巳午へ流る、鮎多し、この所の女の髪、高島田、丸鬘也、帯ハ黒木綿へ菊の枝に蝶の舞を染出したる古風の帯をメたり、山浦村、山うら川を渡り巳午へ向て登る、あかに谷越とて廿五丁登る、大難所、此山も清水ワき出し、山の八合目迄棚田有、絶頂に杵築迄二里といふ杭有、五六丁下り又少し登り、黒岩といふ所にて休、此所見物多し、逸見郡五田村、加茂川を渡り馬場尾村、卯へ向て杵築城下、楠屋為右衛門宅え泊、けふの道法四里廿二丁、杵築城ハ小笠原耆岐守在城、正保二酉年より松平河内守居城になる、大手の向南、江戸日本橋迄

女の髪

海陸式百五十九里三十九丁、此所の女の髪、高島田、丸髻如図、丸髻ハ前広く緒せまし、氏神は若宮八幡といふ、十月廿五日祭、付踊出賑かし



閏四月五日

木下大和守

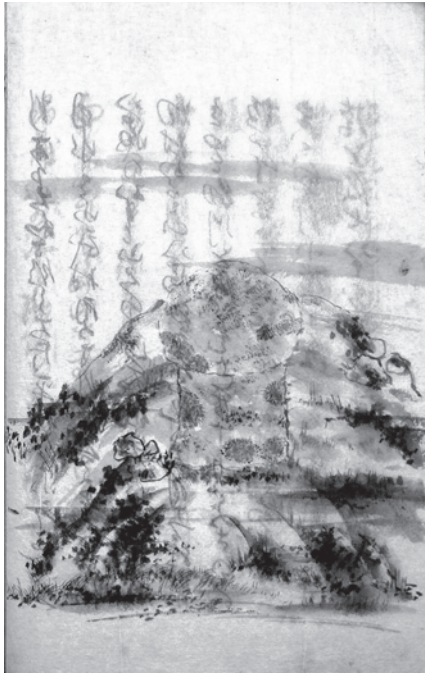
五日 辰の時過出、酉戌の間を向て行、溝井村左に弁天社有、元禄年号の石燈籠たてり、申西

へ向て廿七丁登る、此山を二の坂峠といふ、峠の上に菖蒲迫の池有、絶頂を峰分といふ、百歩斗行、木下大和守領分大片平村、左に小ふし池といふ用水あり、小武村、酉の方行、真向に豊前宇佐八幡のおもと山見ゆる、此所甌岩といふ有、今畑村お、り山八幡社有、祭礼ハ十一月十一日神楽有由、今畑川を渡る、是迄廿丁下り、又さいそい坂四丁余登る、大難所、小武村昼餉す、寅へ向て行、小橋を渡り亥へ向て行、山内川橋を渡、七八十歩行き、高木川といふ川有、酉より卯へ流る、此辺の島田、江戸のとふり、此処にてハ男根をミ、ズ、陰門をバクドウといふ、是等ハ面白き詞也、恒道村、右の方に五所明神有、祭礼ハ九月十一日、右甲尾山と云山有、

恒道村

芭蕉八幡社

若宮社祭礼ハ九月十八日、甲尾山ハ本庄新左衛門城跡、後河内村、上市村、土橋を渡り北へ向て行き、木下大和守、木下次之助領境杭有、亥へ向て行、芭蕉八幡社、祭ハ霜月十五日、金山橋をわたり丑へ向て行、六太郎村、此処に五七といふ大家の酒造有、此辺の山ハ雑木多く絶頂迄麦畑有、中村入口に白糸の谷といふ数丈の谷有、昔白糸といふ貞婦、夫をしたひて此谷へ身を投しより、白糸の谷といふ、中村九郎左衛門宅え泊、けふの道のり式里七丁



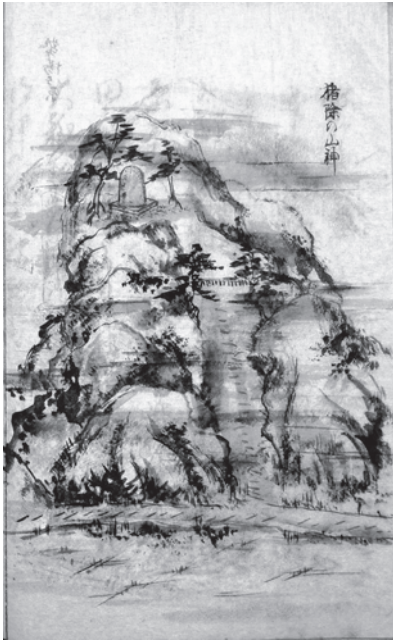
閏四月六日

勢場ヶ原

六日 辰の時出、戌亥へ向て行、左の方に天神の祠有、其前に天神橋、山口村入口に陣屋有、右の方猪除の山の神を祭りし也、吉野渡村建場、立石領、大和守領境、山浦村、右に不動石と云有、辰巳え向て式丁登り勢場ヶ原、毛利元就、大友義景、天文三年合戦の時、此原にて勢揃ひ有し古戦地、壺里計の広野山、無名の石塔二十基有、是ハ戦死の塚の由、中にも鼻くり石とて高さ壺丈余、石塔横穴、此石の穴え綱を付て大友の余類の者、中国より曳来り、戦死の回向の為此所へ建し由、自然石にて石塔の形ある石、文字もなく昔のさま見えて哀也、此原ハ南北七八丁東西十三丁、此原を巳へ向て行見物多し、此所の女、割島田也、土橋をわたり日指村、平ヶ倉原二丁程下る、大難所、三枚板といふ井手の上橋を渡り、四所明神の社有、神体は天照大神宮、春日大明神、八幡大菩薩、鹿島大明神、物旧しよき社也、巳へ向て五丁登、古城谷といふ長尾野原四十五丁登り吹上の辻、夫より馬倒坂といふ難所を下る、右に海を見はらし全坊山殊外絶景、山に添て十丁余急に下る、女緒ヶ久保、此所家三軒有、男九人女三人住む、卯辰の間へ向て行、石割場谷を九丁行て日出城下へ着、木下大和守領分、町ハ宜しからず、東西八丁余南北三丁余、日出角右衛門宅え泊、けふの道法四里、日出城は元祖右衛門大夫延俊、慶長六年城地拝領、同七年城を築、代々居城、大手向東、城付高式万五千石、大坂迄海上百廿八里、海陸合日本橋迄式百六十五里三十五丁

日出城

猪除の山神



勢場ヶ原



閏四月七日

久留島信濃守

七日 辰の時出、西へ向行、左に海見えて、きのふ通りし道のうら道を海辺に添て行、日出領、久留島信濃守領分境杭有、辻間村の海辺を未申へ向て行、戸増川を渡、此川の橋を車橋と云、石にて丸くなりたる橋也、森領頭成丁、家数百三十軒、船着にてよき処なり、女の髪形ハ江戸のとふりにて、着物ハ縮緬、太織の類也、松平主殿頭領杭有、小浦村、此所も船着よし、ゑかミ川橋を渡、小坂村、坂口峠へ未を向て二丁登る、頂より又田の尻の坂壺丁急に登る、頂より壺丁下り、百歩斗行、荷落といふ処有、亦木坂を登り少し下る、ぬくミ谷、温ミ坂、ぬくミといふ温泉有、かに坂を登り卯へ向て行き、真宗齊念寺といふ寺有、墓所に門徒の棺のやうなる物を拵へ新墓の覆とす、此所を行過て王子権現の社有、石の大鳥居、亀川村磯辺を南へ向て行、白亀の祠あり、嘉祥元年六月白亀一双出現献之、朝、元の地に放、大石を建る、号亀甲、此村辺ハ温泉涌出し所七ヶ所、家の軒下を温泉流れ、水洗鉢へ樋にて取便利也、平田村、未申へ向て行、小石垣村、氏神八幡社十月十五日祭礼、其脇に弁天社有、祭ハ六月十七日、鶴見村温泉涌出す、地獄七ツ有、廢湯、鳶山、鍋山、照湯、今井、縁内坊、神池、地獄といふ熱湯わき出し、湯玉煙立、見るもおそろし、下馬松とて、馬乘にて通れハ落馬すといふ松の下に森清右衛門の墓、其脇に吉弘加兵衛の墓有、慶長五年大友、黒田の合戦の時、鶴見原にて討死す、大友の家臣ひら仮名にて書き、石ハ苔むし、昔のさま見えたり、吉弘の墓は、近來建しと見えたり、此処を過て中石垣村、南石垣村、南へ向て行、右の方に鶴見嶽を見て行、是より久留島領境、松平主殿頭領分別府村西法寺へ休昼餉す、仮亭主朝見村庄屋百郎、浜脇村、芝戸山へ登り口、

鶴見嶽

温泉

地獄七ツ

高崎山

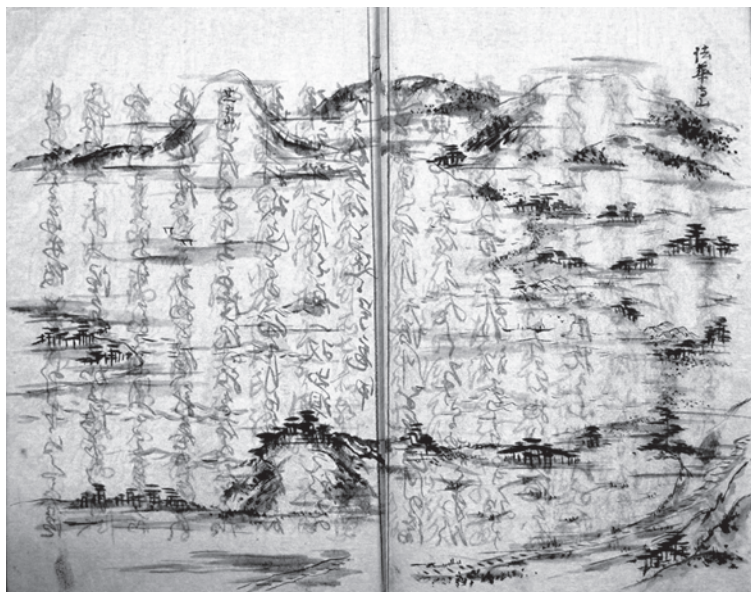
一の坂を未申へ向て登る、右の方に海を見はらし絶景、西を向段々登り、十一曲りて赤松といふ、少下り赤松といふ池有、此所百歩計行、岩の中腹に三十三番の観音、自然石をきさきさきにて安置す、田浦村を午へ向て四十七曲り壱里登る、絶頂芝の辻といふ、沖の島々見ゆる、島名、吉島、手島、伊与しま、牛島、姫島、笠島、南の方に佐賀関見え絶景、此所を四極山(しはつ)、高崎山ともいふ、絶頂二丁程ハ雲の中也

雲の中の 風や涼しき 芝戸山

松平信濃守

半道計下り高崎村、新村、申原村、段々下り由原八幡(作懸)の大社有、一の花表より二の鳥居迄二丁、二の鳥居より本社迄二丁余、豊後中の大社也、祭礼八月十四、十五日、松平信濃守城下入口迄壱里三十丁下り、城下町、堀川丁の酢屋勝右衛門宅え泊、けふの道法七里、大難所、松平信濃守居城、縄張は早川主馬、福原右馬助、竹中伊豆守、同采女正、日根野織部正、府内城居住にて城築追々出来いたし、万治戌年、四代目松平左近将監入部、当信濃守迄九代居城、大手向南、城付高式万三千六百九十石七斗式升式合、名産、寒干鯛、粕付梅、粉糠付鮎、銀杏、日本橋迄海陸式百八十里三十五丁、女ハ若きハ針打島田、年増ハさへかけに結、家数千三十九軒

府内城



法華寺山

万治二年もりせいへもん墓



閏四月八日

八日 辰の時過る比出、卯へ向て行、府

内村ワイケ大分川を渡、川幅三十間船渡し、下
那村郡カ、此辺ハ馬を多く遣ふ、中津留村七

島を作る、七島ハ琉球畳の藺なり、萩原
村、新貝村、松平主殿領御預り所、高松
村、福寿寺にて昼餉す、仮亭主三郎八、

中津留村
大分川

南へ向て同じ道を帰り、中津留村を西へ
向て、大分川の渡場を右へ見て行き、羽

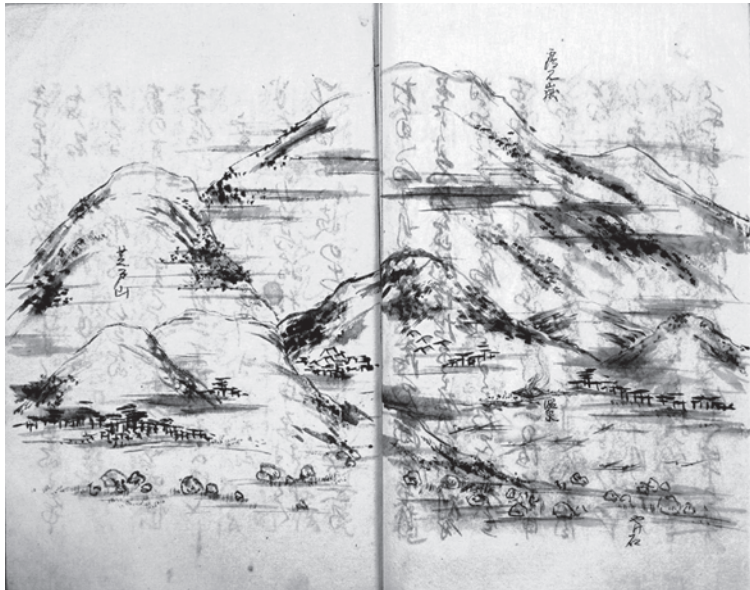
田村五十歩計行て、延岡領片島村、大分
川を卯より酉へ渡、船渡し、此船頭ハ何
れも大小をさして棹を遣ふ、珍らしき船
頭也、此処ハむかしより大小さしの渡守

の由、羽屋村、卯へ向て行き井蕪村(いのかぶら)、此
村ハ家居よく蔵多し、永興村(りよむじ)、竹上村、

上村、此辺見物千人計も出たり、百姓伊
右衛門娘たつ廿五才、親孝行の由ゆへ、

見物千人

見物の中より呼出し、褒美なとらせ孝



湯布川

行を誉しに、娘よろこへるさま也、顔かたちは相応、色白く髪は割島田、髪と顔ハ奇麗なれとも、着物ハ膝限の籠服着たり、湯布川を渡り阿南山京城寺、門を二階にして鐘撞堂とす、寺堂ハ奇麗にて相応の寺也、中尾村、是より酉へ向て二丁登り野田村、黒野村、能登守領分古原村、矢張酉へ向て行、赤野村、此処見物三千人計も出たり、同村惣五郎宅え泊、けふの道法五里十七丁半

閏四月九日

九日 辰の時出、酉へ向て行き、丸太の坂を登り来鉢村、東行村大地台といふ所に池有、広さ三反三畝程、植坪村、信濃守領分朴木村、百姓勇助方にて昼の餉す、此家の床の間に御札箱有、中を見しに宝暦年中巡見大河内善兵衛休札、今一ツを見しに是ハ天明の巡見池田雅次郎休札也、神の札の如く尊ミしはいと正直なる人気也、主殿頭御領所椿村、陣尾山四十八洞穴有、昔鬼神此山に籠り天子より勢を向らるゝ、によつて鬼神亡ふ、其跡を合戦原、今は合の原といふ、椿山高さ三十二丁、此山穴有、穴の長さ九百六十間、人の入らぬ穴也、旗谷といふ谷有、深さ数丈、此所閑呼鳥、時鳥、鶯一時に鳴て面白し

あしひきの 山ほとゝきす うれしきは

老うくいすも もろともに鳴く

由布嶽

北を向て登る、丸太坂より式里半登り合の原立場、又山道を行き由布嶽の裾を行、此山を豊後富士といふ、殊外高山にて八合目迄ハ雑木生へ、八合目より上ハ岩山にて、木草少しもなし、

人の登ることかたし、絶頂に障子岩とて、障子を建し如くの岩有、其岩の間深し、乳母の懐といふ、日和かハる日には此峰より雲を吹出す、誠の名山也、閑呼鳥多し

かんこ鳥 鳴は曇るや 由布の嶽

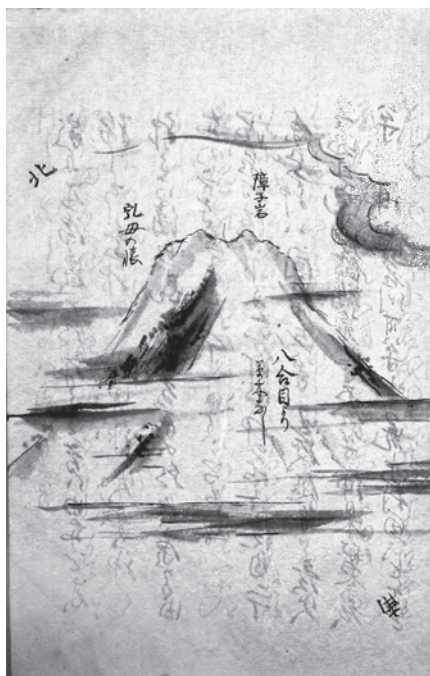
温湯村

六社の祠

北へ向て行に、此辺萩一面に有、花の比ハ絶景ならんと里人に尋しに、所の者も花を見し事なしといふ、田植付の前に此萩を残らず刈取、田の茵にするといふ、山裾を申西へ向て行に、主殿頭領分境杭有、温湯村、此山の辻よりたんく一里ほど下り、温背戸上の松とて大木有、此下に大石のいと苔むしたる有、石の中程われて割口壺寸程あり、其中に蛇壺疋すめり、この蛇は神虫にて上十五日は此石の中に住、下十五日は是より半道程坂下り、六社の祠有、此宮にすむといふ、極寒にても上十五日ハ石の割より体をあらハすといふ、申西へ向二十一曲りて下りて、由布の鳥居あり、額に木綿嶽大明神と有、昔ハ由布を木綿と書し、祭神は火男神、火壳神也、神主ハ溝口勘解由藤原の朝臣康方、由布の高さ巷里八丁、巡り三里なり、温泉村坂の下に六所明神の社有、境内二丁余、祭神は八国常立尊、国狭槌尊、彦火々々出見尊、鸕鷀茅葺不合尊、神日本磐余彦尊、神無儻名川耳尊也、荒木村田へ七島を作る、此処より小倉城下迄廿六丁有、松平主殿頭御預所、荒木村庄屋文六方え泊、此土地は四方は山にて、夏も泊し夜ハ曇りて別て寒く、小袖四ツ着て火鉢にあたり、夜を明しぬ、此辺は温泉有て田へ流れ入て、苗生立て実入るといふ

温泉

障子岩

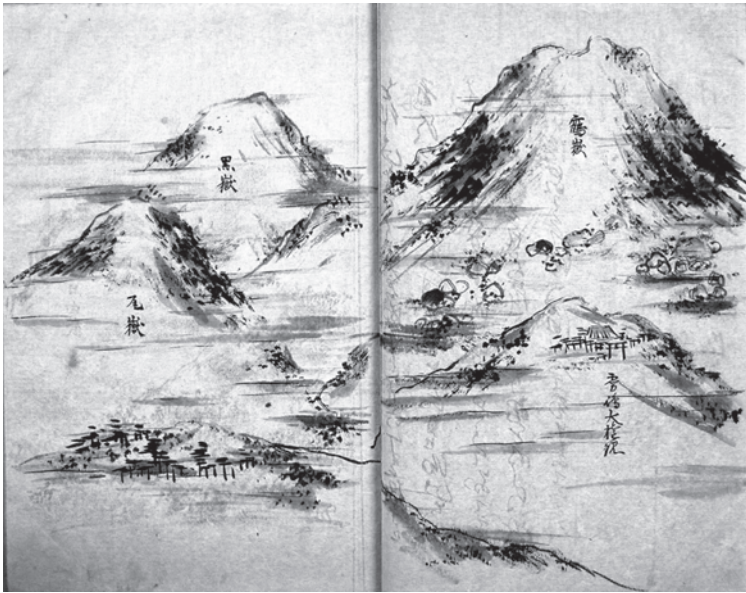


二ツめの 四月も寒く 火桶哉

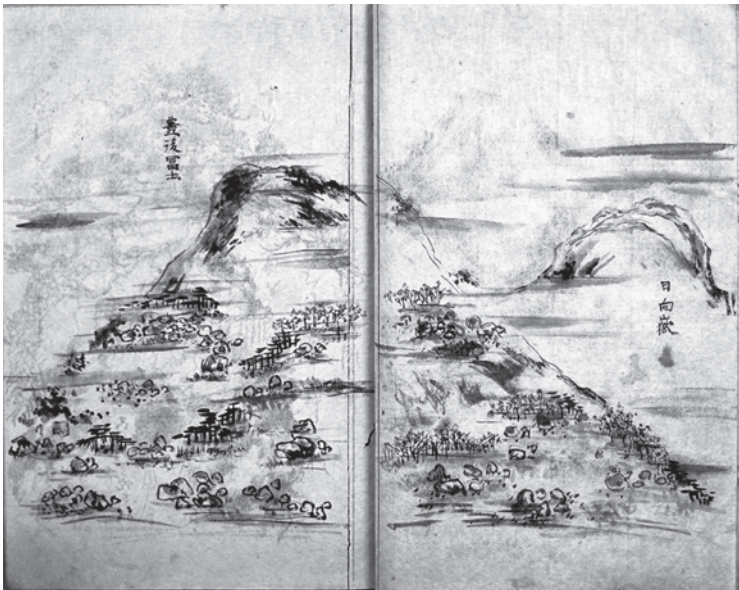
朝八田ことに煙立昇り、朝霧にましハリていとけしきよし、けふの道法五里半
わき出る やまの湯壺の 流れより

立やけむりの 雲とまかへる

鶴嶽



日向嶽



豊後富士

この割レに蛇すむ

閏四月十日

石室村

十日 辰の時比宿を立出、丑寅へ向て行、石武村とて温泉有、戌亥へ向て行平原といふ、二丁登り原山頂のえのさい(元カ)といふ所にて小休す、此山萩多し、一里半程登り出生村の内、今宿といふ所にて昼休、西へ向て行、鬼ヶ原、しこて原、毒水谷といふて毒水流れ出る、岩室村を弐丁程下る、又弐丁ほど登る、左方に平家山といふ山有、平家の残党籠り居、今に其血筋住しよし、三四年以前に岩間の流れより薙刀流でせしをひろひ得たる者有、とうくミ谷の下きりふさきと云所有、四里往來の中程に只耆軒小家有、小松坂を未申へ向て壱里程登り、山の辻より下る、左之方に肥後のおいた山見ゆる、又五丁程登り五丁程下り、境石といふ大岩有、この岩往來へ



久留島信濃守

張出、高さ二丈も、其中程に白銀下り有て、きら／＼と光る、此玉を棹もて取らんとすれば次第に上へ上り、取得る事難しと土人物語す、又廿丁下り、久留島信濃守陣屋町森丁、曾右衛門方え泊、此所家数百十七軒、男三百十一人、女貳百九十三人有、氏神は祇園社なり、祭礼は六月十五日の由、妙見の社も有、祭礼九月九日、此辺の女は、老若ともに結綿島田鬻也、けふ道法六里

荒木村
温泉の図



閏四月十二日
四日市村
万年山

十一日 辰の時出立、帆足村を南へ向行、寺西（空白）支配所四日市村、戸畑村、川有、向の方に切株山・万年山、右に城ヶ尾山、魚返り瀧有、は、四百四十三丈、深三丈、高さ五間有由、西へ向て二丁程登る、此辺ハ水の手よく四方山なれとも、山の上棚田有て絶景の所也、代太郎坂を西へ向て四丁登り小休、夫より四丁程急に下り日向群馬原村、この所より小倉え十八里、江戸え二百九里有り

閑呼鳥 鳴や雲吹く 山の洞

馬原村
豆田
久留島領月出村入口より両方大石張出し、漸々道三尺にて岩屋え這入にて、心を冷して行ぬ、久留島領月出村入口よりカントムムラ両方大石張出し、漸々道三尺にて岩屋え這入心地そする、カントウ村と読わけハむかし勅使此処え下り、あの月の出し山ハ何方に当ると問れしに、関東の方也とこたへしにより、かんとウ村と唱へよと云れしに、今もかんとウ村といふ、同村良八方にて昼餉す、薄木坂を三丁急に下る、殊外難所、久留島領寺西（空白）御預所の境、馬原村を下る、此辺カゴとて紙になる（橋カ）コウツを多く作る、申西へ向て行求来里村、つく坂を戌へ向て行、式丁のほり小金谷、小金の清水とて（空白）頂上原にて小休、森領城内村、豆田丁繁昌にて家九十六軒、庄手村作太郎方え泊、けふの道法七里

閏四月十二日
隈

十二日 辰の時出立、辰を向行、隈丁繁華の土地にて家員二百廿九軒有、下井手村を隈川え添て行、此辺の女老若ともに島田鬻なり、玖珠川渡し場、川へ網を引張置、其網を船にてたくり

なから川を渡る、苗代部村^(のしろべ)へ船着、熊野権現社有、神木銀杏の木、高十五間、廻七間有大木也、
袖野木村^(ゆののき)、巳午へ向行、続木村、栗林村、五馬市村^(いつまいち)をとふり坂を登り、王来大明神社有、此辺
の女色白く奇麗也、新城村を壺丁程登り、二丁程下り三打谷坂六丁のほり、出口村、官兵衛、
此所にて亭主の事をタイシユといふ、肥後の国え三十丁、江戸え式百九十式里有、けふの道法
四里壺丁

閏四月十三日

本城村

十三日 辰の時過出立、寅へ向行、塚田村壺丁上り半丁程下る、くの木原といふ坂を式丁余の
ほる、酉戌の間へ甚急に壺丁半下り本城村、壺丁半登り少々下り又登る、此山藪多し、山の中
程を寅へ向て行、此所赤き稲、赤き麦を作る、里人鬼はたといふ由、三丁程急に下、山浦村を
又登り、此所に小川有、八島川といふ、式丁急に登り二丁程下る、豊後の国ハ山多きゆへ、二
丁や三丁のほるは山とハ云ハす、地瘤といふ、五丁も登り五丁も下るのを山といふ、妙見の社
有、大樹茂り苔むして、上壇の石ハ自然石へ段を付有かゆへ、登るにすへり歩ミかたし、社ハ
二間四面、尊像ハ七寸計りの木像、いとも尊し、社の傍に瀧有、殊外冷水也、小倉坂といふを
六丁登り、小倉原にて小休、右左え曲りながら小田村へ出、廿丁急に下る、大難所にて籠の中
ハ逆になるか如し、四十八曲て漸々小田村へ出、満徳寺え泊、けふの道法四里

小田村

閏四月十四日

十四日 辰の時出立、辰へ向て側川に添て行、此川の向ハ過し十日泊りし森町也、瀬戸口村、中山田村、上塚脇村をとふる、此辺の女色白く髪ハわり島田、花芥子を多く作る、北大隈村、南大隈村、小谷川を渡り栗野村、土橋を渡、上目村、川上の嶽二丁程登、右田村を巽の間へ向て行一丁程急に下り、馬頭山壺丁下る、野上村の内字奥といふ、壺反程の場所の岩の中より木化石団粉石出る、土人ハ双石たふし又は砦石と云、唐の芋のやうにて三四寸許の丸石も有、野上村久三郎方へ泊、此日雨降けれハ

雨の日や 玉ふりこほす 麦の髭

けふの道法三里八丁

(十五日の記述無し)

閏四月十六日

十六日 卯の半時に出立、後野上村に一抱程の松あり、女男の□□を生て珍しき木也、未を向て行、筒割坂一丁登り、道の真中に筒割石といふ大石有、辻坂下より八丁登る、卯の方へ向、又壺丁登り、田野村入口より式丁登る、一丁程下り白鳥明神社、石鳥居本社七間、四方杉の大樹繁し中の社故、物旧りて尊し、宮の脇の畑の中にウンセン躑躅の大株、式間程も広こりて有、

一丁登り壺丁下り、千町牟田、音無川、昔旭長光の住跡也、右の方に歳神の小社有、長光長者の氏神九月十五日祭礼、備物は稗の団粉に神酒を備る、千町牟田の七不思議

不斷鶴

なる川

音無川

青梅

中川修理大夫
直入郡

青藜 殺生石 念仏水

小菅立といふ所にて小休、中川修理大夫領分、直入郡高津原村カウツハルもミキ原を弐丁程下り、水無川、小松ヶ池、又壺丁下り、小松ヶ池の観音有、観音坂を十三曲りて二丁下る、此辺木萩、苦參マツ多し、左ハ嶽々たる高山、右ハ底も見えぬ谷底を流る山水の音は聞ゆれとも、雲の為に見へず、向ハ黒嶽、諸木茂り、名のしれぬ鳥の鳴て物凄し、山の中程を行、仁多尾といふ所にて小休、二丁程下り右に高札場有、其脇に將軍地蔵森山八幡有、栢木村、中野村をとふる、右の方に石神明社の社有、祭礼四月朔日、八月朔日也、唐瀬川橋を渡、伊小野村庄屋次郎右衛門方にて昼餉、已へ向て壺里登り半丁下り、又十八丁登、あきの坂常盤といふ山有、大峠建場、久保村入口より壺里下り、南を向て行、土橋建場、社家村、下廻村、糶山八幡社有、祭礼二月初の卯日也、御室川、御室橋を渡る、此川は北より南へ流る、湯原村義平方え泊、此所の女鬢さしたほさし入れず、わり島田、此辺の流行唄

湯原村

京ハ三条ふり はしめやつこふりたす 大津絵や

勢のうなきの 長道中 五十三次双六の さいさき 切

けふハいかなる吉日よ 思ひかけなき顔を見る

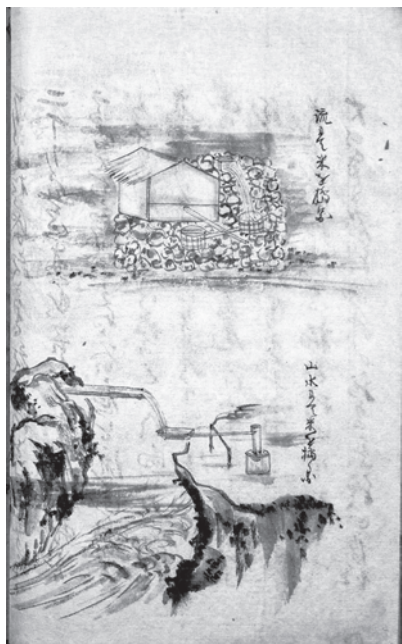
とひたつやうに思へとも 人めありやこそ むねのうち

ほんにしんきの しゃはせかい 切

けふの道法八里

小松坂

流にて米を搗図
山水にて米を搗図



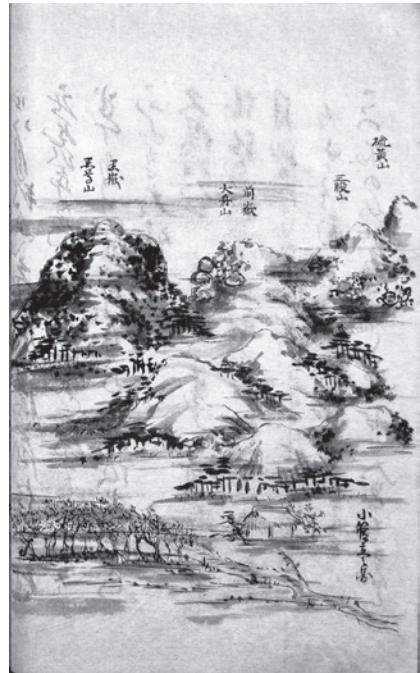
小管立の図
三股山

黒嶽

閏四月十七日

山田村

十七日 辰の半時計りに出立、油山午未へ向五丁登り、堤村より三丁下り、上野村を酉へ向壺丁登る、此所肥後熊本への往来也、追分より左え曲り行建場、夫より段々六丁下り小高野村、又壺丁程下り、又式丁たらく下りにて両頬大石張出し、諸木生茂り、洞へも這入心地にて、甚急に六丁下る、此坂を新道坂といふ、此辺の女野業をよく稼くと見え、老若とも女色黒く異形のさまにて、さなから鬼神の如くなり、山田村入口より壺丁半登り、もちつき坂、田平村入口より壺丁下る、日々旅中、登りてハ下りくするにはよはりぬ、



狂歌 豊後路と 柚のたつきと よく似たり

のほり下りつ 日をくらすなり

大筒稽古場

岡城下町

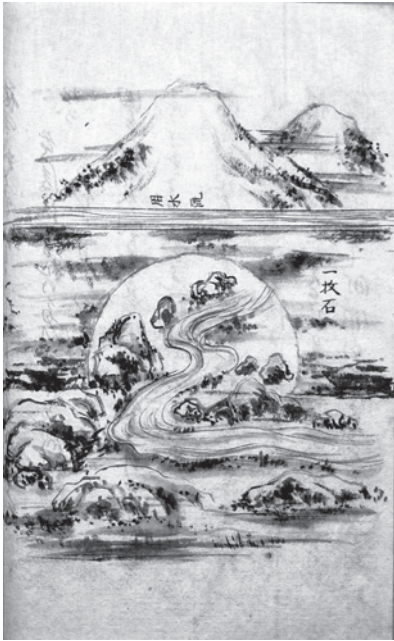
田平村何右衛門方にて昼餉、已え向て行、高尾村を壺丁登り長慶院村、式丁下る、此処に用
有、政所村、左弓嶽、中川家の大筒稽古場、千引村山の下、中川家仕置場に壺丈程の南無阿弥
陀仏の石塔三本有、梅生橋を渡、平村、下木村をとふり、岡城下町、竹田丁正木屋九郎左衛門
宅え泊、中川家居城ハ、文禄年中当所へ所替へ後築、代々居城、大手の向い乾の方、嶮城にて
三嶮城の最上と称するも尤也、江

観音坂の図

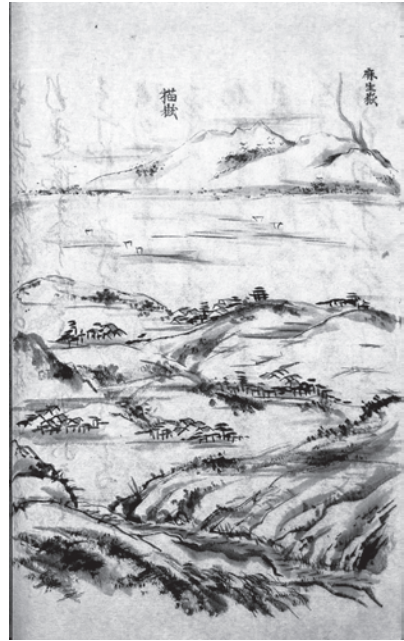
戸迄海陸式百七十里余、天保五書
上高七万三千百八十七石式斗八升
四合也、書上高よりも余程宜く富
貴の国也、城下は町数拾壺丁、家
五百八十軒、男千三百四十式人、
女千百十一人、大町、人多し、小
倉城下と同様也、女は色白奇麗な
り、けふの道法三里三十壺丁

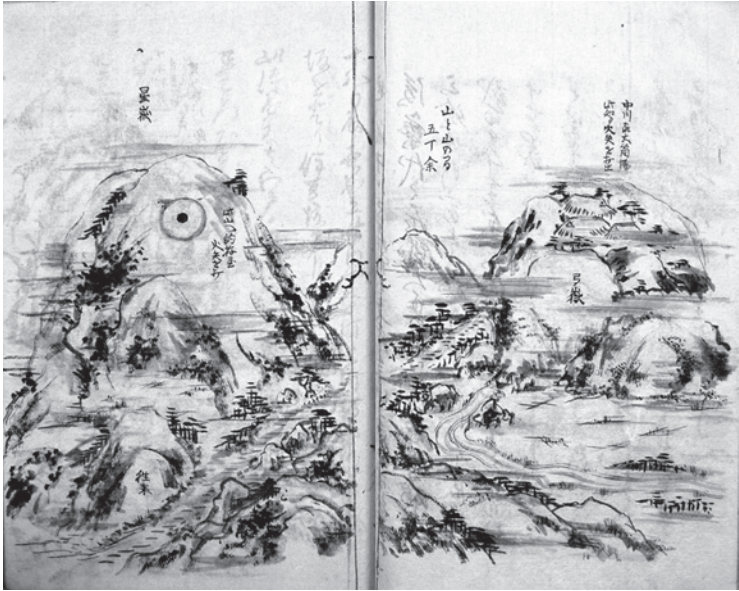


一枚石



猫嶽





中川家大筒場



下木村瀧

閏四月十八日

侍屋敷

見物人

十八日 辰ノ時出立、竹田丁、本町、上町、侍小路より弥五兵衛坂を登り、伊豆坂を下り、鷹匠丁、侍屋敷をとふる、此侍屋敷は江戸の千石位の屋敷、中にも家老中川平右衛門屋敷石垣高組あけ、一万石位の屋敷さまにて横の石垣高さ四間程ミかき石にて、石の間より岩芝生へ誠に見事也、薬師坂より左の方に岡城を見る、ぬめかせ坂橋、大野郡片ヶ瀬村、南へ向て七丁登り騎射馬場有、三ツ的馬場、長さ三丁程有、下はるの馬場、建場、まと坂、四丁下り、又三丁登り、辰を向行炭焼村、此所より正面に豊後富士見ゆる、大久保村東の畑建場、上自在村黒石田坂耆丁下り小川有、宇田枝村入楽寺昼飯、寅卯え向て行、馬場村、井上村、此辺田地宜敷、一坪二付米式升余取れる由、女は老若共割島田に結、小賀田川、入田賀瀬橋を渡る、此処見物人多し、凡三千人程出居りし、知田村、河宇田村岩下といふ所建場、江さり坂式丁半程登る、此山は岩を割、往来を付たる也、この所も見物千人程も出る、女は色黒き顔へ白粉を付、江戸の者に見する心持にて出たるさまおかし、髪はわり島田にて、色のさめたる紅絹のきれをかけ、着物ハ浅黄木綿の紋付、帯ハ木綿の中形、赤きしこきをメたる形はいと面白し、前川橋をわたり、左草村、津久田原建場、三丁程下る、小田川、埋木山の左右より流出、末ハ犬飼川(イヌ)え落る、宇田枝村潮次郎方え泊、けふの道法三里三十三丁

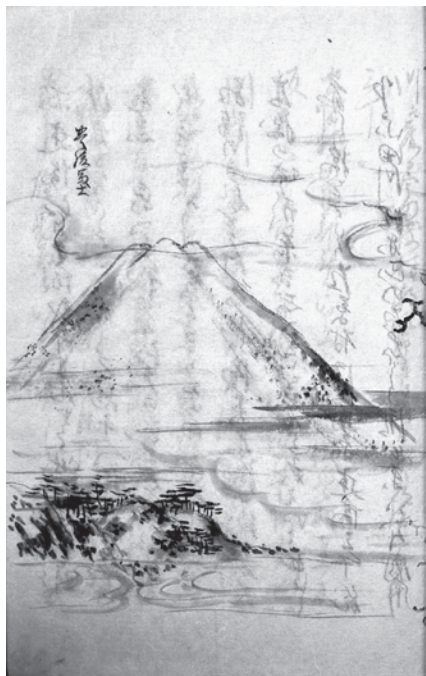
犬飼川

豊後富士

閏四月十九日

大無礼村

十九日 卯の半時計に出立、宮迫村、伏野村、カエノ木坂寅へ向て百間登り、伏野村の坂三丁下り、馬渡川、此川の水上は中つる川より流れ、末ハ犬飼川え落る、無礼村、はなたて坂を七丁登り、花立峠にて建場有、五丁下り左の方に御嶽山見ゆる、大無礼村、尾小畑川南より北え流、末ハ犬飼川え落る、この処に雄鬼石といふ石有りしに、雌石をほしきよしを鬼の聞けるにや、一夜の中に持来りしより、不思議の石にて、地山の八間も有、平の石の上に丸き鬼石を乗せ、小石三ツ間に置、下の石と鬼石の間六七寸も透て有、さハリたらは谷へも落へきやうなれとも少しも動かす、いかさま鬼のしわさなるや、代村、琵琶の頭といふ坂有、甚難所を弐丁登



奥畑村

り、辻より式丁下る、此道は、四尺にたらず、左ハ足元より数丈の谷、下ハ小畑川の急流にて胆をひやし、漸々に下り、川の淵を行、此川の鯀鳴声、豆笛を吹か如し、鳥飛石にて小休、広川橋をわたる、奥畑村、谷の前橋をわたる

初に聞て 猶更淋し 谷鯀

谷川の 滝ふとる日や 鳴くかしか

谷川の 鯀鳴日や 降る小雨

岩と岩の あハひを落る 谷川の

聞もさひしく 鯀なくなり

鯀の事を里人は、セ□コヲといふ、蛙也とも魚也ともいふ、里人もしらす、東へ向ひ川のふちを行、おひげ橋を申の方より寅へ向渡る、奥畑坂を廿二丁登る、此辺芒多し、皆斑入也、石油橋を渡きり、山橋、小倉橋を渡、畑返にて休、上津小野村、此処雲の中にて少しも先は見えず、此山紅葉、橋の木多く、寝々として嶮岨、谷を覗くもおそろしく、左の方の高山に象の腰といふ有、廿九曲で十四丁下る、坂下橋を已え向て渡る、谷間の鶯の今をさかりと鳴ければ

鶯の 老せて谷に 鳴日かな

日向延岡領

太鼓橋、藤合橋を渡、此川の元ハ畑返し谷より出て日向延岡へ渡、南へ流、大荒岸橋を渡る、此辺ハ麻作多く、麻畠の匂ひハ殊外よき匂也、この山よりも石炭出る、下品の由、中つる川橋を渡、少し行き、のつる橋を渡る、長さ八間、又広瀬橋をわたる、長さ十二間有、釘戸村を過、

上河内村

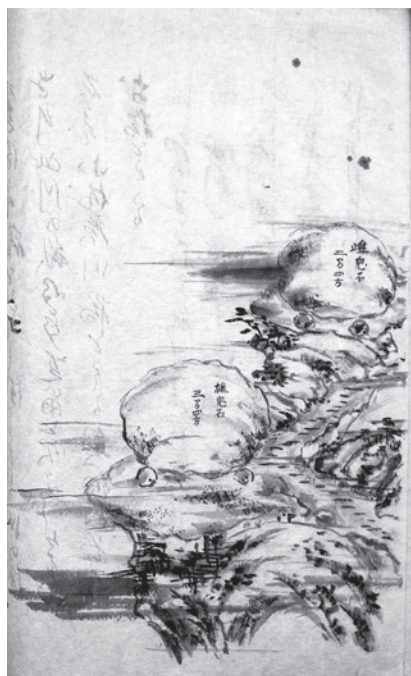
雌鬼石

雄鬼石

小野市村九馬之助方に昼餉す、東を向て橋をわたるころは雨頻に降出し、棚田の水増て、田毎に水を切て落すゆへ、小瀧か幾つとなく重りてけしきよし

雨の日や 田毎に滝の 面白ミ

上河内村老丁下り榎坂を三丁登り、又式丁登り三丁下り酒利村柴三郎宅え泊、今日は昼迄里数有故、高飛石小休にて、鮭を八十の重に二重、老尺の折に二ツ出しぬ、代承れ八百文の由ゆへ、やうく壺朱遣ハしぬ、けふの道法六里



閏四月廿日

毛利伊勢守領

仁田原村

廿日 辰ノ半時出立、むしろはた坂三丁上り上河内村、村井尻橋渡、下河内村峠より三丁下り、又式丁登、毛利家領分境、豊後ハ人氣あしきなれとも、中川領分ハ人氣宜し

○毛利伊勢守領分え入、伏木峠を卯へ向て十三丁下る、いとり口橋を渡る、建場、大石村愛宕の祠有、大石川に滝有、小野上川の右に添て東へ向て行、左の方に龜の山といふ山有、月形前川橋を渡り、名主龍右衛門宅殊外立派なり、左の方に月石宮の祠あり、霜月三日祭りのよし、たかひぐりと云所を壺丁のほり、又壺丁下り、瀧川といふ早瀬の川有、良へ流る、大鶴橋をわたり仁田原村、上直見村、金原村、いてきた橋、これも早瀬、松下橋を渡、百姓又左衛門方にて昼餉す、豊後ハ杉の木少き所なれとも、此辺ハ杉の大木有、赤木村、上直見村、くるす川、横川、田原川より落合の川にて、末ハ臼杵へ流る、森岡仙念寺といふ真宗寺有、なにハ川橋を渡、長さ廿六間余、新峠壺丁半登、下直見村、左に歳神の社有、神体ハ木像、咳の願を懸て癒れハ小石をあける、右の方に谷垣といふ小川有、少し行て下直見川とて、幅廿間許の川けしきよき所也、此辺も杉の木多し、立ヶ峰坂建場、百姓家いみな立派にて土蔵も所々に見ゆる、岩井手村に松王大権現社有、六月朔日祭礼、簾山坂壺丁登、切畑村二丁半下り、石打といふ所家居宜く、田作ハなく畠斗にて麦、さつま芋、たはこ、麻を作る、この所に祇園社有、大石鳥居、宮ハ瓦屋根にて殊外立派、祭礼は六月十四日、神楽有、大樹の杉の木多くよき社也、毛利領分ハ此辺より、山ハ少く平地也、壺丁程行小川有、水上ハ切畑山の間より出て良へ流れて細川といふ、末は海へ落る、番匠といふ所にて小休、番匠川船橋、沖船三十四艘横につなぎ、外

上岡村

つなき船十艘、遠くいかりに留置、大造なる事也、川を渡、上野村、上岡村、此所見物二千人程も出る、女ハ老若わり島田にて白地単物を着し、紅染中形木綿裏、半多りを掛、白粉をあつく付たるさまおかし、左の方に愛宕山、諸木茂り尊し、乳母嶽権現社有、祭礼ハ霜月廿五日也、上岡村、古市村を通る、此所紅花畑多し、けふハ花盛にていとも奇麗也、半ひらきハ黄花にて菓子^ノ如し

黄と紅との 花落てや 紅花畑

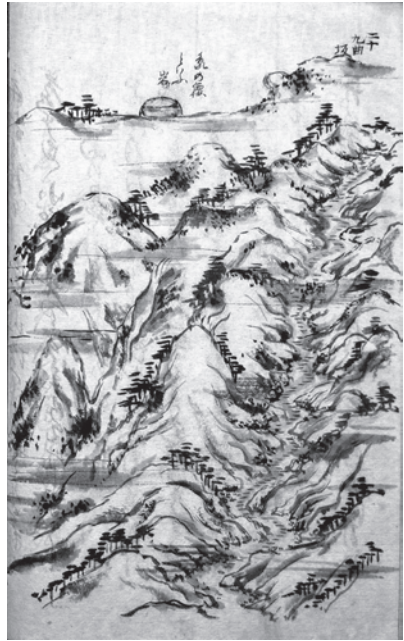
つミなから 口へふくむや へにの花

佐伯城

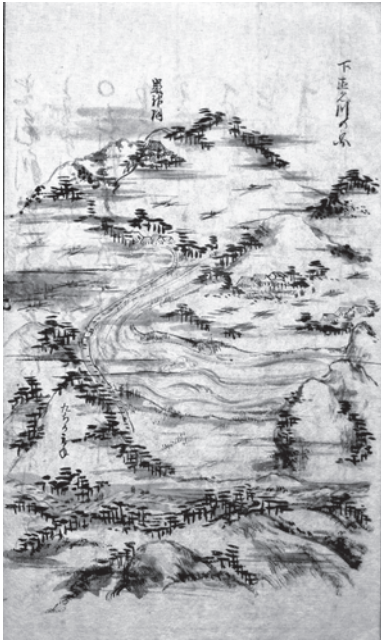
切畑村、下野村、此所壺里半程平地、山無、左に藤の宮大明神社有、八幡宮有、久部山大日寺、此山に少地藏の堂四十五有、城下の入口に船藏有、大船三四艘這入有、右の方に虚空蔵の社、神前に金的の額をあけて宜き社也、城下入口門より内ハ両頬家中屋敷、煉塀にて殊に立派、松の並木を卯へ向、湖国寺へ泊、亭主佐伯^町丁源右衛門、佐伯城は元祖毛利伊勢守、慶長六辛丑年日田より所替、翌寅年城を築く、其後代々居城、石垣八間半、櫓数五ヶ所、櫓門四ヶ所、城付知行高貳万石、新田高七千五百二十石、江戸迄里数二百六十六里、城下名、商町、中町、古市町、中島町、横町、土井町、船頭町、蛭子町、住吉町、浜町、鍛冶町、中ノ町、家数貳百二十九軒、男五百廿七人、女四百九十四人、此節しんくいゝの唄流行、流行歌ハ肥後熊本よりはやりはしめ、此所にてうたふよし、けふの道法七里

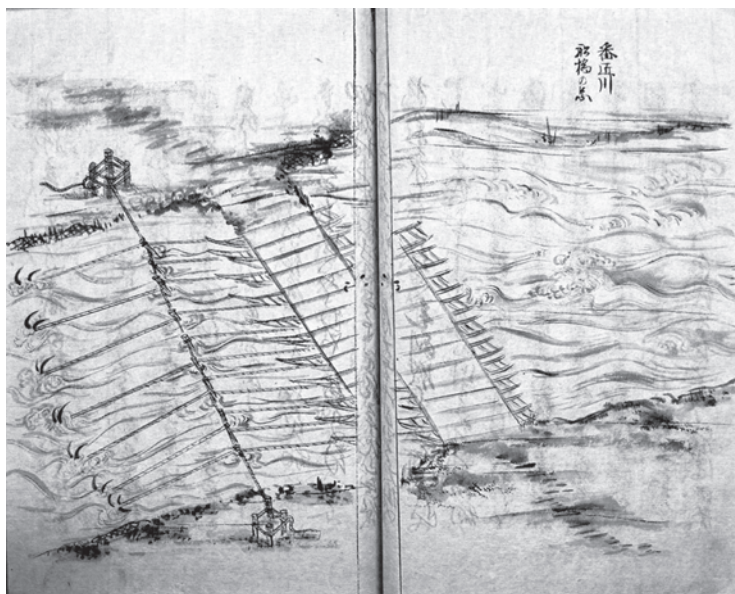
二十九曲坂

象の腰という岩

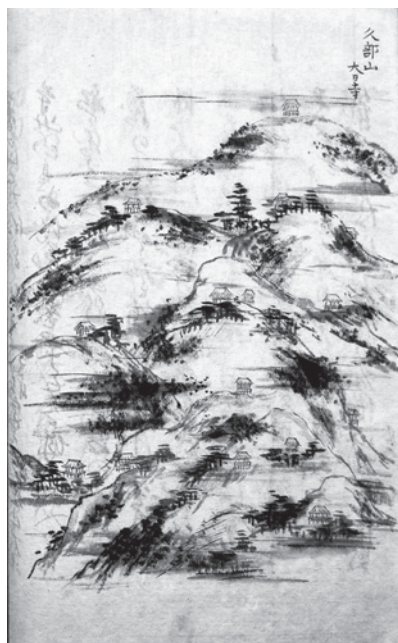


下直見川の図





番匠川船橋の図



久部山大目寺

閏四月廿一日

廿一日 辰時出立、西へ向行、古市村迄きのふの道をとふり、右へ曲り津賀峰城山とて天下雅春といふ人の城跡、弥越と云所にて小休、二丁登二丁下り、大坂本村川有、番匠川の川上の由、貝崎山の下を行、床木村竹岸川、水ハ鏡山より出、佐伯領え落西へ流る、川は、八間、鞞台越、百歩斗行少し砂川場有、是より鞞台下りに幾筋となく小流有、鰍多し、此所より大坂迄海上百四十二里、江戸迄三百五十里、毛利家よりもかさり馬二疋出る、装束は赤の厚房をかけ縮緬手綱、尻たをひ緋羅紗、尾袋山繭ちりめん、胸かけへ鈴千程も付、障泥へハ波に兔を羅紗にて縫伏せ、地はヘルヘト也、腹の辺へハ板メちりめんの裁を地を引する程に下げ、目を驚すはかり也、鏡山坂廿七丁、廿五丁下る、

津久見村

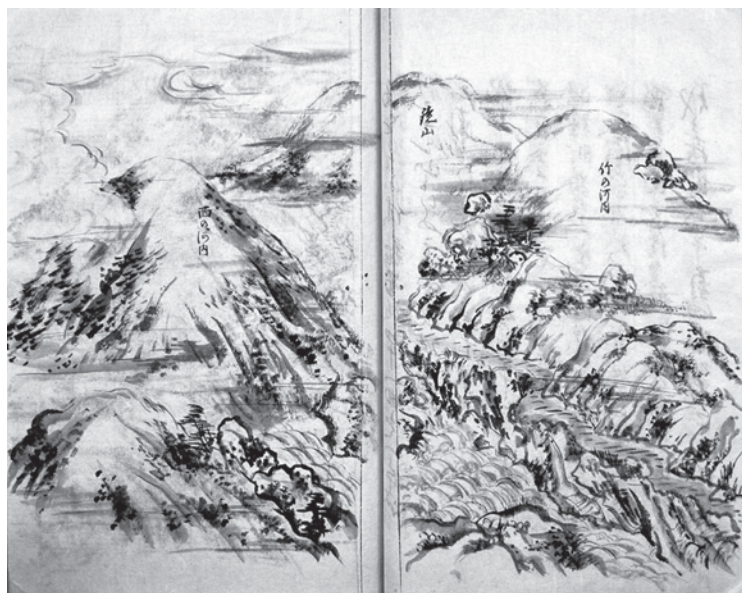
稲葉能登守

白杵城

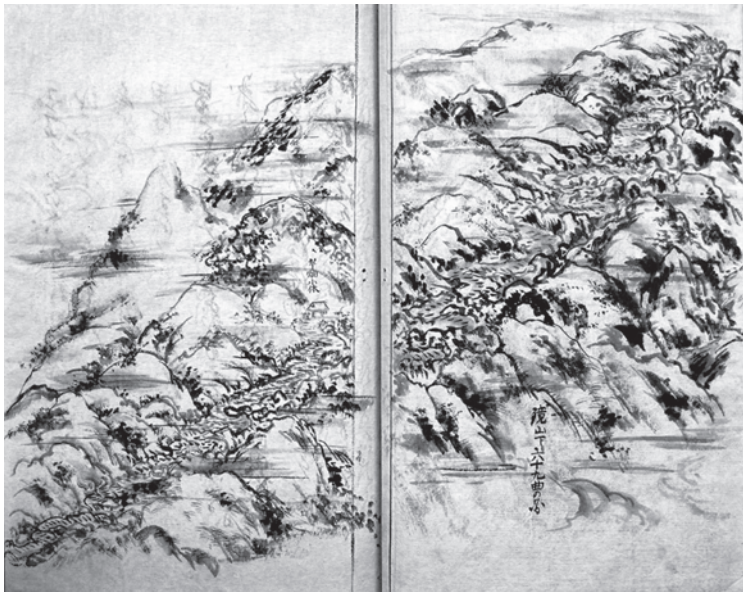
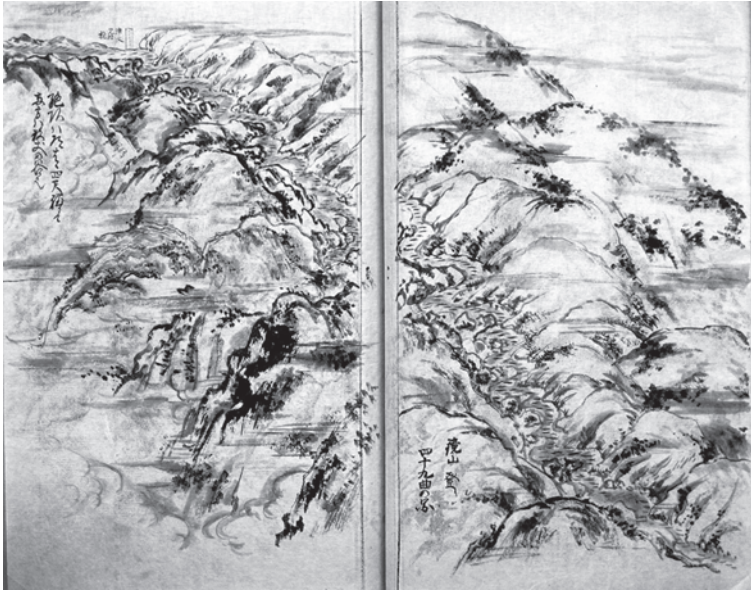
鏡山、坂廿七丁、廿五丁下る甚難所、戌へ向行沓切小休、この辺の谷川瀬早く段々山より落来る水故、所々に瀧有、昼も鰍鳴物凄し、されとも見晴す処ハ絶景、四十九曲て絶頂、津久見村、両頬大石出張、漸々駕のとふるはかりの道、鏡山を下り鍛冶屋橋を渡、岩屋村樹平方にて昼餉、宮野峠式丁登、稲葉能登守領警固屋村、右の方に鴻昇山、其下に桜ヶ瀬川、申より寅へ流る、松崎村、道籠村、岡村、長野村、迫口村、柿ノ木かたをにて小休、鞍留坂四十一曲登、つくミ崎サンナン山といふ高山絶頂に観音有、中腹に三南といふ庵室有、四十曲下り内畑村平地にて小休、海添村、都合四十六まがり下りて水車有、登一里下り一里の山也、白杵城下白杵町安右衛門宅え泊、稲葉能登守居城ハ、元禄（水巻）六年大友宗麟築、其後大友家改易、太田飛驒守居城、慶

要害よき城

長五年稲葉家代々居城、大手南向、櫓数
三十三、城付高五万六千石余、外二新田
千貳百八十二石、江戸迄貳百五十九里、
城下町名、本町、新町、唐人町、豊屋町、
横まち、港町、城町、田町、戸宝町、家
数四百廿軒、男千貳百十五人、女千貳百
三十八人、女ハ奇麗にて髪ハ江戸のとふ
り丸髻針打島田、結綿島田、衣類ハ縞縮
緬、太織の類を着る、城下町に祇園社有、
祭礼ハ六月七日より十五日まで、十一月
朔も祭礼、家中屋敷ハ佐伯よりハ劣れり、
城ハ海へ張出して要害よき城也、けふの
道法七里



竹の河内



鏡山登 四十九曲の図

鏡山下り 六十九曲の図

閏四月廿二日

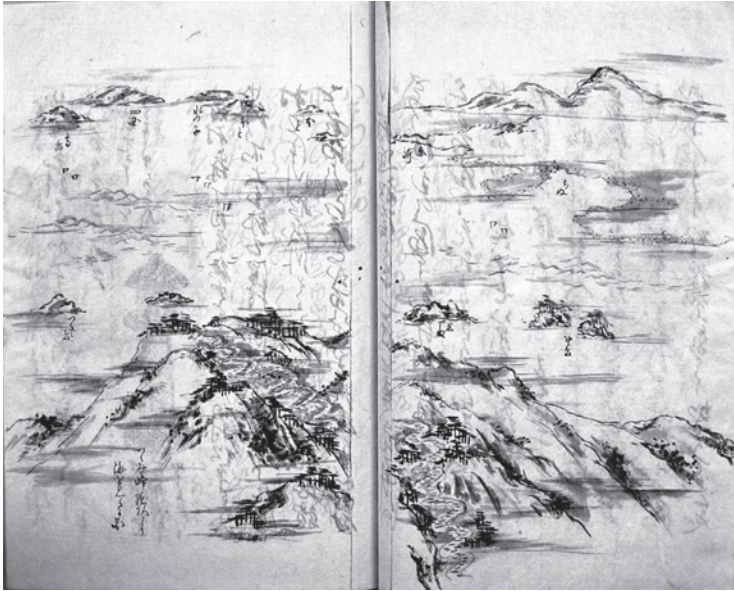
見物人

毛井村

鶴崎村

廿二日 辰時前出立、市浜村、田篠村、乾を向て行、江無田村、江無田川巽え流、山の谷より出末ハ海へ落る、此所も見物四五百人出居る、末広村、此処も見物三百人計出る、大將軍の宮有、何神なるや土人もしらす、祭礼九月廿三日、祭の日ハ神樂興行のよし、溯川坂より通村、かよひ橋を渡、白木峠といふを廿一丁登り小休、十二丁下りて生首谷といふ有、むかし大賊居て人を殺し、故此名有よし、四丁登り広内峠小休、十八丁を廿一曲下り広内村勘兵衛方にて昼餉す、西へ向行、ぬめり坂荖丁登二丁程下る、赤さこといふ松並木の間をとふり、赤迫の大堤といふ広さ五丁四方の池有、二丁坂を登り戸川、深迫、船橋有、十七艘を並へ番匠川のとふり板置て渡す、毛井村小休、此処見物三千人程出る、老若ともわり島田、着物ハちりめん木綿也、女ハ七七八歳より鉄漿を付る、大津留村、横尾村、此辺も見物二百人計出る、稲葉家領分人氣至てよし、高田川左二岩船八幡社有、立派の宮也、五ヶ村の鎮守九月初の卯祭礼、村角力を興行す、此処も見物式百人はかり出る、稲葉家よりかさり馬三疋出す、毛利家のかさり馬と同様也、道のはたに燈籠有、高さ九尺（火袋穴なし、火をとます事ならず、時代は二三百年も立しやうに思ハる）、森村森丁、内藤能登守領分、門田村、松平主殿頭御預り所大分郡乙津村、細川越中守領分鶴崎村、乙津川船渡、川は、五十間、此処ハ泥亀、鰻を名物名物とす、江戸迄式百八十里、鶴崎町和泉屋八右衛門宅え泊

つくみ峠



時代は二百年も立しやうに思ハる

時代
百年も
立しやう

閏四月廿三日

細川家

稲葉領

廿三日 辰ノ時過出立、白嵩川幅十間、船渡、細川家領分ハ手当宜く、百姓家毎に水を手桶に汲置、火鉢、土瓶をかけ茶盃(碗)を付て出置、此所も見分多く、女の髪ハ蝶々鬘、男の髪ハ外国と違ひ元結を十三四卷、髪の根をつめて結、政所村女割島田、皆色白し、住吉社有、八ヶ村の鎮守、六月廿二日祭礼、浜村、竹下村の間を辰へ向て行、稲葉領分里村、小野瀬にて小休、王の瀬川橋廿六間、此川中より細川領分となる、市村、此処にも千人程、女ハ割島田也、かなど橋寅へ向わたる、江川にて小休、ましね川橋を渡、のほりたて坂一丁登二丁下り細村、小猫川橋をわたる、橋ハミな杭とも石也、神崎村教導寺にて昼餉、亭主八之允、寅を向行左の方ハ海、此所をいおく灘といふ、大平村、大平山、大志生木村、しのお坂八丁登り小休、六丁下る、蒲、(ははせ)柞の大樹有り、其下に虎御前の石塔あり

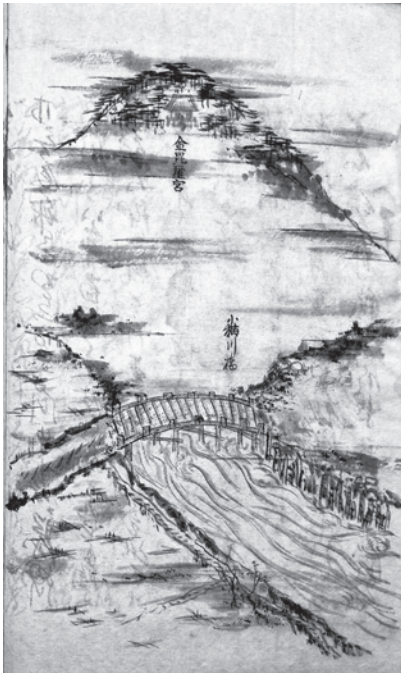
虎御前の したふ涙か 夏の雨

佐賀関

加藤清正

白丹村、志賀武蔵守城跡、妙見山に上野六郎城跡有、佐賀関太次右衛門亭主にて、関大権現の神職安部主膳え泊、けふの道法六里、此家は、大坂御陣の節、有馬左衛門介御味方に参り、此沖にて難風にあひ、船くつかへらんとせし時、関権現を祈り、早速風やミ辛ふして大坂へ着船し、御軍の間に合、勝利を得、軍功を顕したり、帰国の、ち神職安部の普請せし也、今其普請のま、にて有、石大華表は細川忠義の奉納、総門、神楽堂、拜殿、本社ハ加藤主計頭清正の奉納、慶長六年神前の額は早吸日女大神宮と有、海上を守御神也、本社神楽拜殿ハ清正の普請のま、にて今に手入なきよし、鬼瓦は清正心願にて手製篋入焼せ奉納いたし、其後細川玄旨の心

小猫川橋



願にて手製篋入奉納いたし、今に其瓦は屋根に有、神馬牧は大友家奉納、今以名馬出る、拝殿額有（佐賀関権現の社を船の内より拝して、佐伯城主高慶、うら風に 打よする波の 関守る 神も舟出を いそくとハしれ）（享保丙午年正月吉日、奉納 心願成就 高田忠広作 肥後国主従四位之下行従兼越中守朝臣 細川宣紀）神職阿部の宅庭に大蘇鉄有、本木一丈五尺、下枝三尺八寸、枝数廿八本、珍敷蘇鉄也、是ハ九住産にて、源平の乱に平家の落人此家へ入婿に成申候時、土産也といふ、社地の御手洗上の池をタラチメといふ、下の池をタラチほとといふ、此宮脇の方に水車有

閏四月廿四日
伊予国

廿四日 豊後国廻り仕舞ゆへ、阿部宅の前より船に乗る、伊予国への渡海船は伊達遠江守より出す、船の名は南渡丸、艚は五十八挺立十六反帆、小早船、十六挺立六反帆、漕船筑後丸、四十挺立十一反帆、供船伊勢丸、四十八挺立十四反帆、小船、十二挺立六反式布帆、二艘

閏四月廿五日

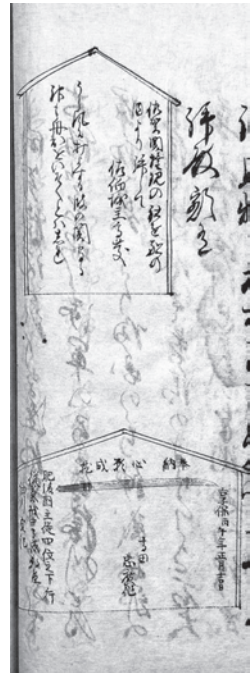
廿五日 雨天ゆへ滞船

閏四月廿六日

廿六日 夕、申時出船、子丑の方へ向て船行、右の方に鳥有、寅卯の間を向て六里行て夜に入り、挑灯万燈の如くともし、数の船の水にうつり景色よし

星よりも 数のともしや 船涼し、

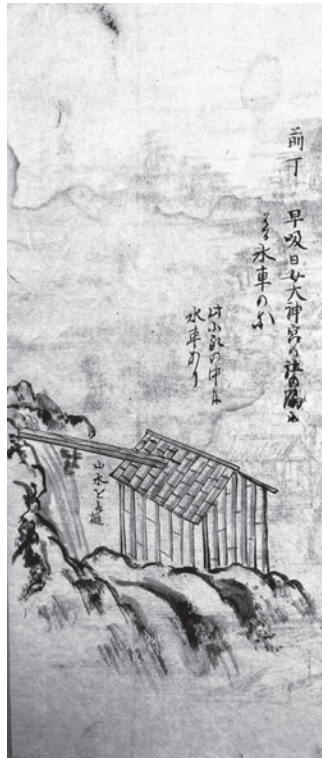
(前丁、早吸日女大神宮の社の隅に有る水車の図、此小屋の中に水車あり、山水を取樋)

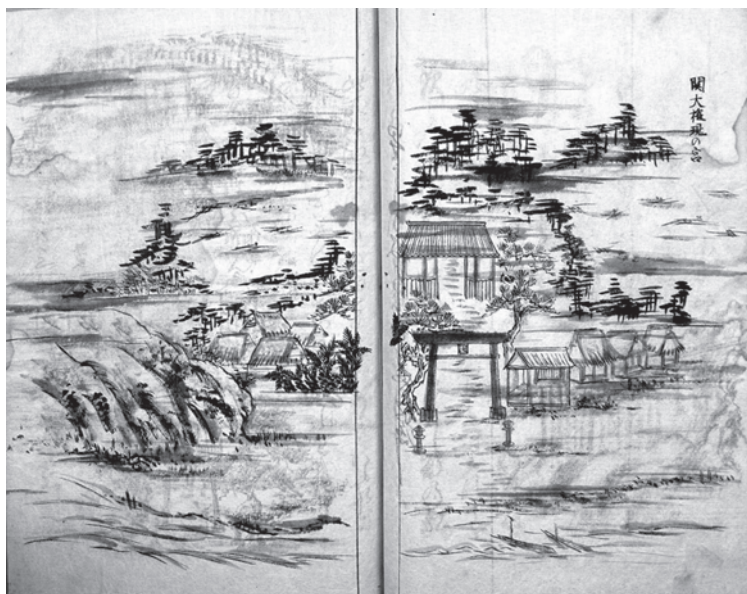


佐田岬

此所の海の深さ八百七十尋もあるといふ、水色青く物凄きさま也、夜に入てハ水主掛声、船たゆめハ太鼓を打、小倉の船太鼓と違ひ、小太鼓に音ハボン／＼鳴りていと淋しく、佐賀関より佐田岬迄壹里、串浦まで壹里半、二名津浦え十八丁、此処え泊、廿七日卯の時出船、田部浦十八丁、幸崎え十八丁、小島浦え壹里、ひつ浦え十八丁、大江浦え壹里、伊予国三机浦え三里にて着

早吸日女大神宮の社の脇に有る水車の図





関大権現の宮

本社
拝殿
神楽殿

